

ないか、堯舜の如き徳政、禹湯の如き仁政は、遂には國境を打破して、凡ゆる人類を跪拜せしめやう。

韓末に於て日本帝國の朝鮮併合は、大部分の朝鮮民族が、王國の虐政に堪へずして、日本天皇の仁政下に跪拜し、生命財産の安固を得て、天命を全ふせむこゝを哀訴した結果であつた、齋藤總督は、文化政治を標榜して、天皇の徳政を斯土に宣布しつゝ、ある、聖天子の徳は風の如く、鮮民の携は草の如くに仁政に偃せむこゝせるに、一部變體思想者の煽動は、今や動もすれば我治の根本に動搖を始めむこゝして居る、憎むべきは言論機關に據れる此の種の煽動者た。

史を按ずるに、漢の武帝が朝鮮を征伏して、四郡を爲せし以來、魏起れば魏に付き、隋起れば隋に付き、唐起れば唐に付き、元起れば元に付き、明起れば明に付き、清起れば清に付き、未だ曾て一たびも王國の意氣を發揮する能はず、宛かも遊女の朝に南男を送り、夕に北客を迎ふるが如く、無節操、

聖天子の徳は風の如し

昏沌として適
歸する所なき
民族性

無氣慨の醜態は、二千年の永き間を繰り返された、而も未だ曾て一たびも藩屬國として精神的に大國に心服する能はず、面従腹背を以て始終した。

己に虚心坦懐にして大國に服従する能はず、又毅然として獨立する能はず、冗語喃喃々として蠢動を繼續するこゝ、今も昔も一向に變はりはない、不肖は朝鮮民族性の昏沌として適歸する所なかりしを、偶然に思はざるを得ない、不肖は十年軍陣を張て、朝鮮民族性の改鑄を絶叫し、鮮民族が政治に自覺し、道徳的に大悟して、日鮮民族の大同團結を達成して、東亞大帝國を築造し、日本天皇の仁政下に翕鳴して、大陸四方に發展し、人類の理想する平和の涅槃に達せむこゝを主張して居る。

鮮人少數の識者は吾人ニ覺悟を同ふし、聲を枯らして横道を踏むな、右せよ右せよと指示して居るが、舌の力は小局部に限られ、變體思想者の新聞雜誌の力は全鮮的に普及し、今や民心滔々として雪崩を打つて左傾しつゝ、ある惟ふに、金明澤氏等の采配する國民協會、有志の團成せる庚子俱樂部、是等

朝鮮思想界の惡風潮を打破し、岐路に立て迷惑せむとする鮮民に、東道の主たらむことを期せるが如きも、當局の言論政策は矛盾して、彼等は遂に宣傳の驕足を伸ばす能はず、邪論の横行濶歩を指目するのみに過ぎない。

不正當なる言論、仁政に叛逆する言論は、當局の嚴乎たる成敗に待つ以外矢張言論を以て之を制せざる可からず、孔孟の姑息なる教學は、老子の哲學を以て之を制する如く、新聞の邪論を討つには、新聞の正論を以てせなければならぬ。

然らば當局は、言論政策の眞意義を了解して、此の種の識者に諺文新聞機關の設立を認可し、正論を以て邪論を討伐するの舉に出づ可しだ、今や諺文新聞の不逞言論は、謂はゆる不逞鮮人に幾十倍の力を以て活動して居る、而して全鮮的に其の煽動の徹底する所、總て鮮民の思想的叛逆は、隨時隨所に勃發するであらう。

當局の土、立憲政治の美名に泥酔して、右顧左眄、不逞言論の取締に斷し

新聞の邪論を
討つは新聞の
正論

民族的對抗心
の運行

第二十三篇 思想問題 (二)

三、民族的對抗心の運行

て躊躇してはならぬ、そして植民地言論政策に一機軸を發揮す可しだ、只一時を滿縫せむとする微温的政策は、不肖等の與みする能はざる所である。

(一五、八)

按ずるに、朝鮮は在昔偏頗なる統一政治の弊を受けて、其の文化の眞價を發揮し得なかつた國である、一般民の自由の思想發達を拒んで、兩班のみが世界の文明的思潮に接せんとしたので、遂に隣を囓むの悔を招いたのであつた。

然るに、我韓國併合に依りて、朝鮮は偏頗なる統一政治の弊を脱し、過去

二千年の民族生活を全然醉生夢死の状態より拯ひ出し、現代文化の標準を日本の近世的文化に採り、謂はゆる日本の文化の思想を以て、朝鮮の諸思想、風俗を日本的に統一せんとするのが、今日の總督政治である、乃ち文化政治である、此の文化政治に依りて、朝鮮の過去の萎縮せる思想が、始めて茲に伸びむとするのである。

文化政治は、日本人と朝鮮人とを打て一丸とし、渾然として一體ならしめむとするのが、文化政治の文化主義である、乃ち我御政治の哲學的基礎であらねばならぬ、總督府は現に此の政治哲學に立脚して、着々其の基礎的工事を進めつ、あるのである、然るに、一部朝鮮民族中の非歴史的文化人や、剛頑にして事理に通ぜざる昧者は、文化政治の哲學的基礎工事中の重要な同化事業を破壊して、日本の政治は受けたくない、朝鮮は朝鮮人が治めやうなき、叛逆行爲を露骨に現はして來たのである。

内鮮人の進み行く道は、坦々たる大道である、或は右せんか、或は左せん

御政治の哲學的基礎

非歴史的文化人

かき迷ふべき道ではない、聖天子の一視同仁の大旗下に、内鮮人は合體して學を勵み業を營み、四方に開大發展せなければならぬ、朝鮮民族の大多数は、此の覺悟を以て従來仁政に蘇生し、徳政に涵養されつ、來つたのだ。

然るに、一部非歴史的文化人や、頑冥にして事理に通ぜざる昧者の煽動に依りて、朝鮮民族の思想は日に月に悪化しつ、ある、元來諸種の思想が朝鮮に發生して、其の紅白を闘はすこゝは、文化向上の意味に於て不肖は散て異論したくはないが、朝鮮民族が日本の政治より離脱しやうと策し、祖國を回復しやうと悶ゆる思想の發生に付ては、當局が其の思想の自然的運行に任かして、傍觀的態度を取るこゝは、統治上甚だ危険千萬と謂はねばならぬ。

然しながら、或は難者もあるであらう、何處にそんな思想が朝鮮民族に存在するか、朝鮮民族に祖國回復の集合思想があるにしても、各人の意識中に存在して、それが事實に現はれざる以上は、何んとも手の着けやうがないではないか、それは寔に愚論であらう。

よし假令へ朝鮮民族が、各個人に於て祖國回復の思想なく、其の思想が民族的共通の體系を備へてゐないとしても、そこに煽動的思想が発生して、朝鮮民族の大部が翕鳴し得らるゝものとの断定が出来るなれば、轉てそれは自然的に民族思想を統一し得る基礎が策成せらるゝものであると信ずる、かうなつて來るに、文化政治の哲學的基礎は、既に其の思想の勢力に依て撼搖せらるゝ、不肖は此の民族思想を畏怖するものである。

折角併合して、内鮮人が半島共同の地上に於て、教育の上に、産業の上に相提携して馳驅せんことを考へて居るに、朝鮮民族が日本の政治より離脱せんことを、祖國回復の思想を發生し來るのとき、當局も民人も其の思想の同化を圖るべきが出来なければ、朝鮮民族は日本民族を目標にして、民族的對抗心を喚發し來るであらう。

今や現に朝鮮民族は、民族的對抗心を露骨に而も勇敢に發揮して來た、それは煽動思想者の成功である、併合前の朝鮮民族には、民族的共同の勢力を

此の民族思想
を畏怖するも
のである

鮮童の私刑事
件は何うか

云ふものは、容易に認め得られなかつた、日本太郎が朴書房と喧嘩をして居つても、李書房や金書房は煙管を喰へて傍觀して居つたが、今日では決して左様でない、日本太郎に充分の理窟があつても、李書房や金書房は、朴書房を睥押して、日本太郎を袋叩きにせずむば己まない、市井の商人然り、地方の農民然り、學生然りである。

諸君最近各地で行はれた、鮮童の私刑事件は何うであるか、平安南道で米國宣教師が、林檎泥棒の鮮童を引捉へて、硝酸で兩頬に盗人の二字を書き込んだ事件に對し、輕薄な日本人が輿論をか愚論を捲き起して、人道問題を擔ぎ出し、鼓を鳴らして之を攻撃したが、朝鮮民族は誰ありて輿論を興さんともせず、袖手して傍觀して居つたではないか。

然るにその後釜山の日本人が、瓜泥棒の鮮童を捉へて、其の顔面にコイルターを塗つた私刑事件には、中央の鮮文新聞は鼓を鳴らして之を攻撃し、釜山の朝鮮人は五千餘人が憤起して騒擾を逞ふした、私刑は勿論悪い事である

日本人は一人として良い事を認めて居る者はない、然し其の私刑者を成敗するには、警察もあれば裁判所もある、何も数千の朝鮮人が集まつて、騒々しく立廻る理由が何處にある。

之は實に朝鮮民族が、日本民族を標的とせる民族的對抗心の養成せられ、發露しつゝある結果である、總督府近頃の諸問題は、教育事業と經濟問題とに集中して居る、經濟問題は外面的生活問題を意味し、文化の進歩も多く外形枝葉の事に過ぎない、乃ち之は當面の政策である、總督府は其の根底に存在する精神の推移に想到して、徳政を布く半面に於ては、或は大壓伏を加へる必要もある、起死回生の良藥は口には苦い、決して甘つたらしくないのである。

願ふに當局は併合以來約二十年、朝鮮民族の人格を拵ゆるに汲々として努力したが、其の人格は徳政と教化に酬ゆるに何を以てするであらうか、輓近民族的對抗心は斯かる教化人に依りて煽動せられつゝあることを發覺せば、

經濟問題は外
面的生活問題

日米相争ふの
不幸なる時機

爲政者も左様であらうが、不肖は實に感愾無量である。

齋藤總督の一視同仁主義、齋藤總督徳政の光り、之は實に朝鮮の津々浦々まで浸潤し、少數の不逞文化人を除ひては、流石に其の徳政には感じてゐる然るにも拘はらず、文化人老弱男女を問はず、各階級を通じて總督の徳政には感じながら、日本帝國を呪ひ、内地人を敵視するの傾向は、鬱勃として養成せられ、民族的對抗心は益々旺盛に馴致せられつゝあるのである。

將來米國が若し日本と戦端を開始して、日米相争ふの不幸なる時機が勃發して、一朝不利の境地に立たんか、朝鮮民族は敵國の力を利用し、祖國回復に猛烈なる力を發揮し來るであらう、之は火を賭るよりも瞭かである、不肖の親友中樞院參議李謙濟君や、儒生金道東君は、朝鮮民族の思想界の現状を視て日本が朝鮮の人心を戡定するには、世界の最大強國にして、日本と不仲の米國と戦て、日本が勝利を得たる曉でなければならぬと云て居る、眞に左様であるとすれば、日本帝國は朝鮮の民族心を囚ふる爲め、米國と戦はねば

ならぬのであるか。

今や朝鮮民族は、新教育を受けたる新人も、儒教に養はれたる舊人も、土臭き農民も、擧つて民族的對抗心を發揮し、祖國回復の思想が、偏隘的頑冥の思想者に依りて、煽動養成せられつゝある、不肖は此の不快の趨勢を視て一種の感慨に打たれざるを得ない。

當局者は決して此の状態を趨勢を、夢想を考へてはならぬ、不肖の考に據るに今日は尤も憂慮すべき此の思想の浮動機であると思つて居る、裏面の内情は當局者不肖等では、見方も違ふやうのこころがあるかも知れぬが、既に民族的對抗の思想は着々養成せられて、今や其の外部に現はれて來たのである。

當局者としては、當面の政策を講ずることのみ汲々して、平生斯かる思想上の問題を無視してこそるまいが、或は閉却して居るではあるまいかと思はる、此の思想の勃興を等閑視して、嚴乎たる政策を講ぜなければ、聽て

憂慮すべき思想の浮動機

文化施設の内面的破綻

發動し來る所のものは、朝鮮民族の猛烈なる民族運動である、今や確かに其情勢を窺みつゝある。

此の民族的對抗思想に依て養成せられたる民族運動の高潮に達するときは内鮮融和なきは靈袖一觸、文化施設なきも木つ葉の如く蹂躪されやう、之れ文化政治の大破壊大破綻である、不肖の茲に文化政治の文化施設の破壊破綻を云ふのは決して外面的ではない、外部生活を謂ふのではない、文化施設の内面的乃ち精神的破綻を謂ふのである、精神的破綻の上に行はるゝ文化政治は併合の精神を蛇の抜け殻にしてしまふのである。

惟ふに聖天子の仁政、齋藤總督の徳政は、歴史上朝鮮ありて以來始めての光輝で、太平の氣象は半島の天を蔽ふて居る、然るに斯民の心を善導し能はぬを云ふ理由が何處にあるか、朝鮮民族に陰謀が潜んで居るにせよ、偽善が潜んで居り、祖國回復思想が養成されつゝあるにせよ、佛の謂はゆる正覺に立ち戻らして、涅槃の岸に掉ささしむることは、同化不同化の論は別とし、

大した難事ではない、乃ち朝鮮民族をして、眞善なる状態に進ましむることは望まれざるこゝではないを考ゆるのである。

然しながら、朝鮮思想界の現状は、叛逆的思想者をして、縦横に叛日本的煽動を逞ふせしめつゝ、あるではないか、日本に對する叛逆思想を朝鮮民族に鼓吹するこゝは、之は重大なる治安妨害者であらう、之を檢束し、其の鼓吹機關を撲滅するこゝは、内鮮兩民族の幸福を迎ふる所以である、微温的發賣禁止や、發行停止位ひでは、何の効果もない、新聞は社會の耳目であり、社會の木鐸である、之を利用し悪用するこゝに於て、社會に波及せる利害の大なるは勿論である、朝鮮の思想者が、此の機關を反日本的に悪用するこゝが朝鮮民族思想の叛日本的に趨向し或は趨向しつゝ、ある所以である。

嗚呼總督政治以來、二十年に垂んじする歲月は夢の間に過ぎ去つた、朝の開風文化の向上、昔日を回顧して隔世の感に打たれざる者はない、が然し思想の混亂は益々甚だしきを加へて來た、さりながら一旦鮮内地に足を踏ん

新聞は社會の耳目であり木の耳だ

叛逆的思想者

で、民族生活の状態を微細に調査すれば、そこにはまだ、道德の基準さへ定まらず、舊道德に對抗せる新道德もあれば、儒學に對抗せる新學問もある文化の普及力微弱なる地方には、尙未だ高壓的道德、奴隸的道德さへ徘徊して居る、そして地方庶民は何んも云ても往年李朝の虐政の迹を想起しては、齋藤總督の德政に浴し、關々として文化政治の有難きを謳歌して居る者もある。

然しながら此の關々たる謳歌の聲は、叛逆的煽動思想者に依りて、伏せられてしまつて居るのだ、乃ち叛逆的思想者は、今や實に此の良民族の地盤に遠慮會釋なく煽動の魔手を伸ばしつゝ、あるのである、現状の儘にて放任し推移せば、不肖は齋藤總督の折角之れまで築き上げられたる德政が、其の光りを失ふであらうこゝを憂慮するものである、此際若し當局が此の意味の濟民策を誤らば、前途二十年を出でずして、朝鮮民族の民族的對抗心は、異常なる力を以て爆發し、其の叛逆行爲は大正八年の高麗驕優に、十倍百倍の力

を發揮し來るであらう。

願ふに現狀は實に當局が治國平天下の經綸に縱横の手腕を揮ふの秋である。叛逆的思想者を壓伏して、速かに仁政の徳光を徹底せしめなければならぬ。此の機を逸せんか、我大陸半島の經綸は遂に大停頓を免かれまい、不肖は之を歴史の上に於て、民族性の上に於て、現今の實際に於て古今を考察して爾く論斷し得るのである、事茲に到れば、朝鮮民族の不幸は勿論、大陸發展を理想せる日本民族の一大不幸である。

思ふに齋藤總督は、聖天子の御政治哲理を遵奉し、仁政徳政の明燈を高く彼岸に翳ざして、汝等此處に來れし魔きつ、ある、總督の徳は清濁併吞也然し治安の大任を背負ふ人々は、邪心の惡鬼は之を取り押へねばならぬ、如來の門前にも、鐵棒を把持した破邪顯正の鬼神は、嚴然として控へて居る。

(一五九)

古今を考察して爾く論斷す

第二十四篇 思想問題 [三]

四、諺文朝鮮日報記者に誨ゆ

不肖が京城新聞に、民族的對抗心の運行を題し、内鮮兩民族對抗に鑑み、煽動思想者の弊の備る可きを論じたが、朝鮮日報記者は九月二十七日の社説に「誤りたる見解」を題して左の如く論じた。

「日本人の朝鮮統治は極東の大問題であるそれよりも關係兩民族に於ては最も重大問題なのである彼の隷屬の境遇に於ける朝鮮人に取りては即ち死活興替の根本問題たる程重大であるが統治群を形成せる日本人に取りても朝鮮問題は心腹の重大問題である相互の立場を異にせる兩個の民族は其の關係せる問題に對しては自ら其見解も異なるべきであるが日本人の朝鮮問題に對する見解は慥かに先入主的偏見に驅られ大局を洞觀するの聰明を蔽

朝鮮日報の識論

ふて居る所が多い朝鮮爲政當局の大多數が既にさうでありそれを通じて材料を取る大部の統治閣等も既にさうであるべきは免かれざるこゝである論客中にさへ往々かゝる者を見るのは朝鮮人の爲に憤慨するこゝ云ふよりは寧ろ反つて彼等の爲めに嘆惜に堪へざる所である其誤れる見解が誤まれる對策を生むは勿論かくて竟には關係兩民族間の災害を誘致するに至るは必然の事であるからである。

近來「草莽學人」ミ自稱する者官憲に阿諛し曲筆を弄し朝鮮人言論界を譏誣するこゝを以て特殊の任務ミ爲し以て零瑣なる藪供の資を惠せんミする者あり所謂榮狗が堯を吠ゆるの類であつて曾て問題ミ爲さなかつたのであるが日本の代表的言論機關にありても朝鮮の問題を論ずるに當り屢々誤まりたる見解を持つこゝは吾人の心外ミする所である。(下略)

(上略)凡そ民族的感情又は反抗心なるものは兩民族の關係が對等たるに至らず恩義を以て信賴する能はざる時必然的に起り來る產物であつて人

草莽學人と自稱する者官憲に阿諛す

韓國は廢邦となつて日本に併合され日本の一部となつた

爲的には如何にも爲す能はざるものなるこゝは多少の見識を有せる者の當然了解すべき所であつて嗚々するを要せないのである此の點に於ては吾人は歸妄の必要を認めない」

ミ暴論罵詈を浴びせて來た、日本の朝鮮統治は極東の大問題ミ云ふが、問題ではない、大事業なのた、問題は遠の昔に解決して居る、彼等は日本の朝鮮統治を、保護政治時代のやうな考へはしてゐないか、韓國は廢邦ミ爲つて日本に併合され日本の一部ミ爲つたこゝを知らないやうだ、論者の所謂大問題ミ云ふのは、併合に依りて既に解題されて居るのである。たゞ世人が通俗に問題ミ云ふのは、日本帝國が朝鮮經綸に於ける、内政の部分的問題である、例へば。

- ▽併合の精神は内鮮人の同化合體にあるが、官憲も民人も同化に對する手段方法は最善を盡しつゝあるか何ふか。
- ▽内鮮産業の同化は何ふであるか。

▽一視同仁の下に内鮮人の差別を撤廢せし以上は、朝鮮人にも權利のみ主張せしめずして、國民的義務をも負擔せしめては何ふか。

▽朝鮮人の新舊思想は盛んに衝突しつゝ、ある、此の思想變遷の過渡期に立て、其の善處の策は何ふしたらよいか。

▽宗教政策は何ふか、迷信は旺盛に跋扈して、邪說日に月に蔓蔓せむし居る、此の對策は何ふしたらよいか。

▽教育萬能の弊は、盛んに高等遊民を繁殖せしめつゝ、ある、速かに社會政策を講究するの要なきか。

さ、云ふやうな事が、通俗に所謂朝鮮問題で、即ち日本帝國朝鮮統治の内政諸問題である、之が諸君も不肖等も、眞面目に研究し調査し、論議すべき諸問題であらう、諸君が一般の朝鮮人に祖國回復思想を養成せしめて、將來機會を見て獨立の叛旗を翻さうと云ふやうな準備は、爲して甲斐なき徒勞である。

宗教政策は何ふか

日本と朝鮮は
一國と一つ
だた日本帝國

不肖は、諸君が此の爲して甲斐なき徒勞に歸すべき思想を、朝鮮全民族に鼓吹し、煽動的態度を取ることに慊焉し、諸君の言論に向つて斬り込むのである、諸君は日本の朝鮮統治を極東の大問題と論じ「彼の隷屬の境遇に於ける朝鮮人に取りては、死活興替の問題たる程重大である」と云ふが、それは一體何ふ云ふことだ、ここに朝鮮人が隷屬の境遇に置かれて居るのか、諸君はいつも日本と朝鮮とを別國視して論ずる癖がある、それはいけない、日本と朝鮮とは一國と爲つた大日本帝國だ、日本人と朝鮮人は、宗廟に祭告して取り結むだ夫婦も同様ではないか、異體同心の社會であることは、勿論である。

人間頭を回らせば神仙のみ、諸君は大局に目覺めて悟らなければいけない隷屬なき口にしたり、死活興替の根本問題なきと論じて、騒々しくも稚氣な言論を行ふことは、以ての外だ、何が朝鮮は日本の隷屬であるか、諸君の父祖が支那の藩屬たりし時代には、支那大國の半島政策が朝鮮を隷屬國視し

朝鮮人を奴隷扱ひにした時代もある、因襲の久しき、其の民族心理の隷屬感が、今尙消滅し切れぬせいではなからうか、我聖代は一視同仁の御政治下に内地の延長したる地區として、内鮮人の差別は撤廢せられ、文化人も非文化人も同様に伏して、平等の政治を受けて居る、何處に偏頗な政治の形跡が認められるか。

凡そ人間が、政治に於ても、生活の上に於ても社交の上に於ても、一律に満足し飽食は期し難い、が其の理想に近づくかむとして、爲政者も識者も不識者も悶へて居る、苟くも一國幾千萬の内鮮民族の居住する社會の政治だ、満足者も居れば、不平者も居るであらう、併しながら諸君の不平は、内鮮人の歩む可き大道を逸した桁外れの不平だ、不肖は朝鮮の政治に就ては、決して内地人云ふ立場のみに立脚しては論じてゐない、朝鮮人の心にも爲つて立論するのが常である、不肖は寧ろ諸君の意を悲しむ一人である、之を地を代へれば、不肖も諸君と同様の態度を取つたであらう、併しそれは既にあまの

一律に満足し飽食は期し難い

併合を翼賛したではないか

祭だ、二十年前の奮發でなくてはならなかつたのだ、併合せる現代に於ては大局に眼光の徹せざる燕趙悲歌の志士を評せらるゝの外はない。

元來不肖は、併合論の喧しき當時に於ては、反對の意見を抱持し、諫諍文千言を草して、時の桂首相に建白した一人である、日本帝國は東亞の盟主で居れよ云ふのが不肖の意見であつた、さりながら日韓の爲政者も良民も大多数は併合に賛成し、朝鮮の哀々たる庶民は、嗚々として天皇の仁政に浴せむこむを樂み、寧ろ朝鮮の朝野に呼號して併合を翼賛したではないか、故に日韓の元首は祖宗に祭告し、列聖に誓ひ、天地に俯仰し、特に朝鮮最大多数良民の協賛を経て、而して後ち決行された併合ではないか、それを今日に至りて何ふしやう云ふのだ。

今日朝鮮民族中の不平分子が、日本を分離して獨立しやうと策劃するなきそんな勝手な事が出来やうと思ふのは、愚の骨頂だ、それは仁義に悞りて不仁義に歸し、政治道徳を無視せる不逞思想の産動に過ぎない、徒勞を混亂に

始終するのみである、諸君は別策はないのか、時代は既に滔々として、人類主義の壇上に光輝を見せて居る、何んすれど諸君は小ちつほけな思想に囚はれて、爲して甲斐なき疆域を争ふことに醒醒するのだ。

思ふに諸君は、現代朝鮮に於ては先覺者であるべき筈である、大局を觀るの明ある人である、苟くも大局を遠觀し、事理を辨するの明識あらば、小局に拘はらずして、堂々たる朝鮮策を講ず可しだ、不肖は諸君の行爲が祖國回復思想を植へ付くるより外無策にして、其の準備思想の逕行を觀破せるが故に「民族的對行心の運行」を論じたのである、而して諸君の煽動思想を壓伏せなければ、朝鮮民族の總ては、民族的對抗より變じて反抗を爲り、遂に兩民族の融和は根本より破壊せられ、内鮮兩民族は大陸半島に確執して、血を踏み旗を捲くの慘劇を演出し、朝鮮人は遂に日本人に蹂躪粉砕せられて、民族的に大破壊を見ないとも限らない、不肖は之を憂ふるのである、諸君の言論は常に此處に導かむしつ、あるこゝに氣付かないのであるか、さりとは

堂々たる朝鮮策を講ず可し

實に盲目滅法の人達ではある。諸君は。

「凡そ民族的感情又は反抗心なるものは、兩民族の關係が對等たるに至らず、恩義を以て信頼する能はざる時、必然的に起り來る産物である」

と云て居るが、失禮ながら朝鮮は、現代日本の文化に後る、こゝ半百年である、半百年先に進むだ民族は、後れて出發した民族が、十五年や二十年で對等にならうと云ふのが既に無理な注文だ、然れども總督政治を大觀すれば文化を内鮮平等にせむとして苦心慘憺せるこゝは、諸君の目には見へないのか此の十五六年間に普通高等大學を合して、一千五六百の教育機關は創設されて居る、更に交通は何ふであるか、通信機關は何ふであるか、農業の改善は何ふであるか、衛生の設備は何ふであるか、苟くも文化の要素に向つて努力しつ、ある形跡は、諸君には全く見へない、不肖は此の故に此の妄者を憎むと云ひたくなるのだ。

日本の文化に後る、こゝ半百年

對等と對抗とを混同してはいけない

日本帝國は、韓國を併合して、内鮮人の同化を達成せむと、朝鮮人の文化力を精神的に物質的に對等に進めむと、此くも苦心努力しつゝある、諸君は大に呼んで兩民族を對等の位置に進めるやう努力せなければならぬ任務を持って居る、不肖が國家の大方針に随つて内鮮同化の上に論議する所もそれである、諸君は不肖が論ずる民族的對抗と、對等とを混同して論じてはいけない。

嗚呼聖天子の仁政は特に斯土を霑ほし、内地人は犠牲にしてまで朝鮮人本位の政治が布かれて居るではないか、決して諸君は不正當の自由を叫び、不平を唱ふるではない、荒廢し切つた一萬二千方里の疆域と、虐けられ切つた一萬七千の民族を起し、政治の常道を踏むで治國平天下の經綸をするのだから、何にも彼も一氣呵成と云ふ譯にはゆくまいではないか、國家の財政には限度がある、日本帝國は朝鮮のみの財政ではない、秩序的に而して漸進的に整理發展は期せられやう。

諸君は深く考へればならぬ

輓近の如く、朝鮮の治安に莫大の國帑を失はしむるやうでは、諸君の期待し不肖の期待する朝鮮民族の文化は、案外に遲滯するかも知れぬ、諸君は不肖が朝鮮の思想問題を憂慮するの眞意は諒解したであらう、諒解したならば速かに不逞思想の煽動を中止して、朝鮮産業の開發、文化の向上に大努力を試み達觀を以て内鮮一體論を唱導す可しだ、現在の如く諸君が朝鮮の思想界を混濁せしむるは、駸々として進みつゝある朝鮮の文化を停滯し、産業の開發整理を阻礙し、朝鮮民族を窮地に陥れ、地獄の底に突き落す云ふものだ、諸君は深く考へなければならぬ。

第二十五篇 思想問題 [四]

五、所謂朝鮮史問題

文化政治、それは日本帝國が軍國主義を抛つて、文化主義に轉換したさい

ふ廣汎なる意味の、文明的政治である、寔に結構なる御政治を謂はねばならぬ、併し文化主義を謂ひ、軍國主義を謂ふ、是れ蓋し常山の蛇の如しで、日本帝國の御政治題目は、必要に應じて軍國主義にもなり、文化主義にもなる乃ち敵國外患に對しては、頭尾一體を爲りて奮進する、此の理想を標準として、吾人は文化乃ち文明人を爲りつゝある。

韓國併合ありてより、既に約二十年、朝鮮の文化は現在如何なる状態にありて將來如何なる方式に依て進歩するであらうか、云ふことは吾人に課せられつゝある重大なる懸案であらねばならない。

併合後の朝鮮が寺内伯の武斷主義に依りて、非文明式に經營せられたか云へば、決して左様ではない、武斷主義の名に於て、文化政治の道程を歩みつゝあつた、而も從來の朝鮮文化史上の智識は、文化の根底に誤謬があつたことを發見し、更に進むでは朝鮮人が個人主義的文化の弊に陥らむとして居ることに氣付き、大正八年九月、齋藤現總督來任以來、遂に斷乎として内鮮

頭尾一體と爲りて奮進する

朝鮮文化の過渡期

文政を連結し、内地延長主義が活躍するに至つた。

文化政治は、朝鮮民をして人間らしき人間たらしむるにある、幾百年地平線下に埋没して、人間らしき生活をしたことはなかつた朝鮮人民は、現代東洋の文化國として、世界に誇耀するこの出来る日本民族を合併し、其の劃一政治に由りて、人間らしく文化生活に轉換されて來た。

不肖は現今は、朝鮮文化の過渡期で、最も憂慮すべき時期であるを考へて居る、朝鮮の歴史は或意味に於て、從來文化主義の道程を示したことは屢々ある、然しながら現今の如く、眞面目なる政治の形に於て、汎朝鮮的に大規模の文化事業の唱道せられたことはない、勿論當局に於て唱道せらるる、文化主義的設計、民間に於て論議する文化主義の意味が、その程度まで文化の實現し得るであらうか云ふことは豫知することは出来ないが、從來不眞面目にして偏狹、小規模の文化事業より觀察するときは、當局の堂々たる文化的事業は、決して侮れないものがあるのである。

漫然擡頭したる朝鮮史問題

顧ふに朝鮮人は、曾て文化を欲して文化を破壊したるものである、目前の政策を講ずるに汲々し、陰謀暗闘政争に没頭して、其の根底に存する精神が墮落し腐敗に導かれつ、あつたことに想倒せなかつたからである、朝鮮歴史は此の意味に於て、墮落しきつた民族精神の残骸を留めてゐるに過ぎない。然るに、朝鮮史問題が近頃漫然と朝鮮人間に擡頭し始めた。曩には朝鮮日報に論述を見、今又東亞日報に議論を發見した、東亞子の言ひ分はかうである。

朝鮮人と朝鮮史

(前略)朝鮮人は非朝鮮人と區別するを言ひ、朝鮮人の長き生活より斯る歴史の産物即ち朝鮮人の精神と云ふべきである、此の朝鮮人の精神は經濟的又は政治的に、他民族に迫害を受ければ受くる程一層激烈である、我々が我々を知るに及ぶが、我々が向上する基礎的必要條件であるだけ、我々の精神を造つて呉れた我々の歴史を、我々が知らざるを得ざることは明かな

朝鮮人と朝鮮歴史

ことである、故に朝鮮人として一層知識の向上を要求し、其の前途を觀測せむとする朝鮮人として、必らず朝鮮の歴史を知らねばならぬのである、各々進む方面に従ひ程度と部内の區別はあるべきも、何れにしても、各々それに相當せる歴史の常識は云ふまでもなく、必要なものである、況して寺内時代より朝鮮人の歴史的事實の普及を、故らに妨害し來れる今日に於ては、尙更ら我々の歴史に對し、我々が知らんとする努力が必要なるにも拘はらず、其地方に於て某思想團體が、朝鮮歴史の研究が、朝鮮民衆の利害上必要なことをいふたさうである、之は大なる誤解偏見と云ふべきであつて、吾人は出來得る限り朝鮮人として、朝鮮史を知らんが爲め努力せむことを望むのである云々

と、東亞子が此の文を草せし意味を詮議すれば、朝鮮は日本に併合されても朝鮮の歴史は併合されない、綿々數千年の朝鮮史は朝鮮人に取りては何よりも尊ましく何よりも朝鮮民族の寶である、と云ふ意味である、朝鮮歴史は、朝

鮮人の精神が籠つて居るに云ふのだからやりきれない。

朝鮮は四千年の歴史を持つて居るに云ふが、歴史として経緯するこゝを得るのには有史實に二千五百年、此の間朝鮮は未だ曾て獨立の國家を形成したることなく、大國の鼻息を窺ひ、大國の冊封に其の干渉せる政治に依りて、國命を持續し、古今獨立なる美名の下に、朝鮮人のみが自動的に其の政府を組織し、朝鮮民族を政治したる當時の政府は、韓末李太王の朝であつて、朝鮮に歴史ありて以來の悪政府であつた。

現今朝鮮人が祖國回復思想や、叛逆思想を懐抱せるものは、政治の何物たるを了解せざる空想者で、東亞子の如き政治的マラリヤ熱に浮かされた頑冥思想の持主に煽動されつゝあるものである。

獨立に對する朝鮮の手並は、二千五百年の朝鮮史が確實に證明して居る、朝鮮獨立の空想者は、冷靜に過去の歴史を考察するがいゝ、二千五百年來果して何處に韓國の歴史が有り得たか、何處に哀々たる蒼生の爲めの政治が行

朝鮮民族を政治したる當時の政府

歴史は理想ではない

はれたこゝがあるか、支那の冊封干渉の政治に、大國強國の侵略蹂躪の足跡に、陰謀暗殺朋黨の軋轢の息はしき史實の経緯ではないか、朝鮮の文化は古しき雖も、朝鮮人の心を培つて眞に朝鮮發展の根底を築き得たか、實に前韓の政治なるものは、少數貴族の黨争政治、誅求政治であつて、人民は流離顛沛の塗炭の苦に泣きし政治であつたではないか。

歴史は理想ではない、實際である、朝鮮人に其の實際の歴史を讀ましむるこゝに於て、文化政治は益々成功しやう、が今日までのこゝろ其の準備がなかつたのは事實であるが、東亞子が論ずる如く、當局が朝鮮史の普及を故らに妨害しやうとしてではない、實際之を妨害するの必要も理由もないではないか、當局としては前韓二千五百年來の國體及政治に關する朝鮮人の自覺は寧ろ歓迎すべきであるからだ。

朝鮮人子弟にして眞に自覺の域に達し得たる曉は、朝鮮人は二千五百年に亘る朝鮮史が、如何に不快にして險惡、如何に卑屈にして事大主義、如何に

兩班階級の苛斂誅求の政治が、人民を塗炭の苦に泣かしたか云ふことを知るこゝが出来て、東亞子等が尊しき誇稱する歴史に、絶望の念が惹起するであらう。

朝鮮史の基礎

韓國の滅亡は、一朝夕でない、其の因て来る所を知るは歴史を見るより外はない、朝鮮の先輩儒生は憂國慨世の見地に立て、眞に忌憚なく其の史實を綴り残して居る、當局の歴史編纂事業にせよ、日本人の歴史家にせよ、朝鮮史の基礎は勿論朝鮮先人の手に成りしものである、東亞日報の記者は自由に勝手に書肆に散在せる先人の史書を購讀するが、諸君の先輩が残せる歴史は操觚者としての諸君は、是非之を讀まねばならぬ義務が必要がある、讀めば諸君は諸君が謂ふ所の歴史の産物、即ち朝鮮人の精神を云ふものが、瞭然ながら分り得るであらう、諸君が朝鮮史を讀むことを官憲が妨害するなんて云ふことは誣ゆるも甚だしひではないか、左様な愚論はせぬものだ。

要之如何に彼等は、言論自由の聖代に生きるこゝが出来たは云へ、不正

善良なる朝鮮士民よ迷ふな

富の民族反感を煽動して、思想的勢力を扶植しやうと焦慮する所に、絶へず無理な言論が行はれる、彼等は朝鮮の社會に於ては識者だ、先づ彼等が政治的に大悟せなければ、二千萬民衆は彼等の煽動に惑はされて、其の歸趨する所に迷ふであらう。

善良なる朝鮮士民よ迷ふな、政治的マラリヤ熱に浮かされた精神病者は、民衆を涅槃の岸に指導するこゝは出来ない、二千萬民衆よ惑はさるゝな、そして毅然として前途の光明に生きる事を考へねばならぬ、今や朝鮮民族中には東亞子の如き法人が、及物を持って民衆の前に立ち、我れの指導に従へよと叫んで居る、善良なる民衆は須らく此の法人を束縛して、其の手より及物を奪ひ取り速に一道一面の治安を保つこゝを覺悟せなければ、民衆は纏て其の及に倒されるであらう。(一五、八)

第二十六篇 文化政治下の迷信跋扈

文化政治の綱紀弛緩を警む
—— 鳴りを打て社會の表面に妄動せむ ——

佛教の信仰失はる

朝鮮民族が、佛教の暖かき恵みと袂別してより、既に五百年、佛教の要素は今尙存在せざるに非ざるも、朝鮮民族の生活中には、殆んき佛教の信仰なるものは失はれて居る。

内地人の來りて朝鮮に在住するもの増加するに従ひ、佛敎各宗は朝鮮に敎線を擴張し來りたるも、都會集團地の布敎に没頭し、地方内地に進入して布敎するの邊無く、況んや朝鮮人布敎をや、當局若し朝鮮精神界の寂寞たる状態に着眼せば、須らく我國敎たる佛敎機關に適當の補助を與へて、文化政治の發展に伴ひ、當然宗教政策に一機軸を發揮す可しである。

佛教は發展すべき素質を持つて居る

宗教無き國民ほご憫れむべきものはない、在朝鮮内地人は久しく産業上の事にのみ心身を奪はれ、其の思想と生活は、大に物質化してしまつた、故に其の結果として彼等の間には、精神上の發動と顯現を見ること能はず、故に節制共濟等宗教道德上の日常の役務を果す機會をも有せざるが如く、佛敎を離れたる多くの生靈は、併合の偉業を整理發展せしむべく、何等の精神的考案もなく、物質的に濫動を續くるのみである、方今内鮮の結合には、我國敎たる佛敎は舊佛敎團たりし朝鮮には、最も大なる力を以て發展すべき素質を持つて居る筈だ、内地人に精神的發動なきを以て、勇猛不退轉の意氣を以て朝鮮を憤墓の地として經營すること能はず、何事も只官憲の施設のみに甘むじて其の糟粕を嘗めむとする者のみである。

此の缺點と問題に乗ぜざるものは、文化を無視せる迷信の跋扈である、不肖は當局が精神問題を閑却して、物質文化に全力を傾注せる觀あるに慚らず、前篇に於て思想問題に多大の頁を費やしたが、朝鮮人の不逞思想に伯仲せる

宗教上の迷信思想が、内鮮人共に滔々濁流の奔放するが如き勢ひで、漲り溢れつゝ、あるを懼るゝものである、此の迷信思想は教育上の缺陷にも因るであらうが、多くは宗教及宗教類似團體の腐敗墮落が、大ひなる原因であること云ひ得る。

現今朝鮮に於て、一番多くの教徒を包擁するものは、基督教で、其の次が宗教類似の天道教や侍天教、其の次が佛教、其の次が天理教や金光教であらう、朝鮮に於ける是等の教徒中、基督教は最大多数が朝鮮人、天道教や侍天教は朝鮮人のみで、佛教徒は其の大部分が内地人のみにして、天理教や金光教は幾むき内地人のみと言ても宜しい位ひである、是等總合したる信徒は恐らく数百万に達するであらうが、彼等が日々夜々口にする所の文句は。

—我等を惡より救濟し玉へ。

—我等を極樂淨土に導き玉へ。

—我等を天道に導き倭奴を攘ふて助け玉へ。

一番多くの教徒を包擁するは基督教

隨時に念佛を唱ふる要領

—惡しきを攘ふて助け玉へ天理王の命。

人若し之等の語は何なりやと問はゞ。

基督教徒は答へむ。

—吾等が此の祈禱に於て祈る所の要領は、天に在はす吾等の父が、吾等を

肉體、靈魂、名譽、生活等の凡ゆる惡より救ひ玉へと云ふ事なりと。

佛教徒は答へて曰はむ。

—吾等が隨時に念佛を唱ふる要領は、吾等に幸福なる生活を與へ、名譽を

與へ、惠みを以て悲哀の境遇、零落墮落の淵より、極樂淨土に導き玉へ

と云ふことなりと。

天道教徒は答へて曰はむ。

—吾等が天に向て祈禱する所のものは、朝鮮を併合したる日本人を、朝鮮

より驅逐し、朝鮮民族を安泰無事獨立に導き玉へと云ふことなりと。

天理教徒は答へて曰はむ。

—吾等が悪しきを攘ふて助け玉へ天理王の命を叫び祈る所の要領は、吾が身より諸々の悪を攘ひ、病者は癒へ、貧者は富ましめ玉へ云ふことなり。

遺傳的に崇拜
の念の寂滅

不肖は、四百年前耶穌基督が、野蠻なる祖先民族に對する布教を、三千年前蒙昧なる民族に對せし釋迦の布教が、其の教義の一致するものありて、斯くも數百千年後に至り、遺傳的に崇拜信仰の念の寂滅せざるを見るに及むて、一種謹嚴崇高の念を惹起し、二教主の英風を欽するの情切なるものあり、然れども吾人が現代の文化社會に處し、一元的宇宙觀より論じ、更に今日の活社會に處して、之を科學の上より論じ、之を哲學の上より論ずるときは、不肖等は遺憾ながら、上古中古時代の迷信的想像を問題外とせなければならぬ。

十九世紀以後 東西民族の社會に生存しつゝ、ある文明の影響は、到底祖先蒙昧時代の民族の比ではない、即ち現代社會生活の合理的改良進歩の驚くべき半面に於て、吾人が現代の文化生活は、實に莫大なる快樂も苦痛も増加し

級人民生活
の苦痛

て來た、吾人が今日の高等なる文化生活は、殆んそ科學の支配を受けてゐないものはない、今や實に科學萬能の時代にして、其の時間及空間は全然異なる意義を有するに至りて、之を釋迦傳導時代、基督傳導時代に比ぶれば實に無限の價値を増加するに至つたのである。

吾人が日常の生活及公共の生活に於て、數百年前吾々の祖先民族が爲し得たる生活よりも、遙かに利便に且つ愉快に、物質上に將た精神上に於て、之を享有しつゝ、あるのである、さりながら下級人民生活上の苦痛は、殆んそ文化の進歩に正比例しつゝ、ある、故に現代の政治政策、社會政策は、下級なる國民生活の安寧進歩に努力しつゝ、あるやうであるが、分業の發達し、機械力の増加するに共に、年々過剰の人口は窮困疲弊に陥りつゝ、あるのである、されば勤勉努力する者は、生活上の優者にして、不努力不勤勉の者は、生活上の劣敗者、生存上の落伍者であらねばならぬ、故に現代人の頭腦は、數百年前吾々の祖先民族の頭腦よりも、強く緊張し、甚だしく消耗せられ、又頗る

膨脹し發達し來て居るのである。

此の時に方り我優良民族が、十世紀十五世紀時代の、迷信的思想の囚はれより脱すること能はずして「吾等を惡より救ひ玉へ、惡しきを攘ふて助け玉へ、貧弱疾病より助け玉へ、倭奴を攘ふて助け玉へ」云ふ祈禱念佛は、一體何事の奇觀であるか、文化を嘲笑し、科學を輕侮すること極まれり言はねばならぬ、勿論祈禱や念佛が惡い云ふのではない、正信に基調して靈魂し、或は念佛することには、吾人が生活の上に社交の上に、一種の精神的信念を鞏固にする所以であるからである、惟ふに現代の文化は、我教育家や宗教家が、國民の頭腦より迷信を打破し、斷して之を驅逐せなければならぬ當に保守的舊思想を一蹴して、釋迦の所謂正信を鼓吹すべきの時期に到達して居る、佛教は上智の者中智の者に、迷信を語らざる所に、佛教の精神が現代に残存して、益々光輝を放たむとするのではないか。

現今朝鮮に於ては、文化日に繁けく、其の社會生活に於て、保主窮困生存

正信に基調して靈魂

神靈君なる老巫女は稀代の優物

競争の落伍者を觀察すれば、祈禱念佛に没頭し、迷信の境地に出入して、自家の不運を救濟せむとする迷信者に最も窮困者が多數である、顧ふに朝鮮人社會には、迷信界の優者に巫女云ふものがある、或は城隍、關帝其の他の淫祠を楮として、又は死人の怨魂に托して、憂苦疾病の原因を爲し、荒唐無稽の言辭を以て、現世の禍福を説き、祈禱呪呪して都鄙に横行し、韓國時代には宮中に出入して、李太王妃閔氏の崇信を受けたることあつた、當時神靈君なる老巫女は稀代の優物にして、朝鮮に於ける巫女の長老であつた、彼は關帝を以て我物として、全鮮の巫女を主宰して居つた。

李太王の三十四年（明治三十年）韓國政府の識者は、主として此の神靈君を放逐して巫女を禁じたが、上は宮中より、下は人民に至り、其の迷信は衰へざりしを以て、併合に至りて明石將軍（時の警務局長）は、寺内伯の命を以て、此の巫女を壓制したので、社會の表面より其の影を潜めたるも、裏面に於ては密に下民の信仰する者衰へず、文化政治に至りて朝鮮騷擾より來る諸般の間

題は、當局をして復た巫女を顧みるの違なからしめ、現今巫女は益々跋扈して、盛んに吉凶禍福を説き病家に入出し、縉紳の家に入出し、佛教の滅亡せし朝鮮の社會には、巫女は陰に有力なる信仰の標的を爲つて居る、不肖は此の巫女が迷信を鼓吹する結果、朝鮮下級民の思想が如何に誘導せらるるであらうかを、簡單ながら述べて置く必要を感じて居る。

關帝は巫女の崇信する所の靈力者だ、關帝廟は其の靈力の出づる機關である、關帝を云ふのは古へ支那の豪傑關羽のこゝである、朝鮮に關羽を祭つて廟を建立したのは、壬辰役後即ち豊公征韓の終末期であつた、韓書に曰く。

「明軍の將士皆云ふ、平壤の捷、烏山の戰、三路倭兵を驅るの役、戰に臨み關王輒ち靈を顯はして來り助く、是に至り明の遊擊將軍陳寅が陣せし崇禮門外山麓に一廟を起し、堂中神像を設け以て之を安置す、楊鎬及諸將各々銀を出して其の費を助く、韓廷亦財力を以て之を助け廟乃ち成る。王躬ら其の像に奠し、土を壘して其の面を作る、面貌重囊の如くにして

關帝は巫女の崇信する所の靈力者

雷雨の異有らば公の神靈至る

鳳目、鬚は垂れて腹を過ぐ、左右二人を廻して大劔を持ち侍立せしむ、之を關平、倉周と謂ふ、是より滯韓の明將出入參拜し、傍人に告げて曰く、東國の爲に此の神助を求めて敵を却く、五月十三日廟中に於て大祭して云ふ、是れ關公の生日也、若し雷雨の異有らば公の神靈至る、是日午前天氣晴朗なりしが、午後に至り黒雲四方に起りて、大風西北より來り雷雨並び起る、頃刻にして止む、衆人喜んで曰く、王の神下臨す、廟前に二長竿を立て、兩旗を懸け、一は協天大帝と書し、一は振威華夏と書す、字は大なるこゝ様の如く、風に因て半空に翻飄たり、宣祖三十五年別に又關王廟を興仁門外に立つ、是より先明朝四千金を以て、撫臣萬世徳に付し、命じて關王廟を立てしめ、其の詔に曰く。

「關公の靈素に中國に著名也、倭を平くるの役亦顯助に頼る、韓國に於ても亦當に之を祭祀す可し」

是に於て地を興仁門外に擇び、大臣に命じて役を監せしむ是に至り

始めて役を訖はる、凡そ塑像（土を塑して金箔を貼る）圖繪、殿廡、門廠悉く明朝の制に倣ふ、大享して以て之を落成す、依て扁額を明朝に請ふ、明帝命じて「勅建顯靈昭德關公之廟」の十字を以て之に榜す。

關帝の靈力を
信仰して居る

京城に建てられてある關帝廟の由來は、右に述べたる通りだ、朝鮮人が關帝の靈顯を信じ、其の靈力を信じたのは、三百五十年前の舊時代にして、當時は勿論其の時代の識者も不識者も、之を信じて居つた、現代の文化社會に於て、如何に巫女が其の靈顯靈力を叫び傳へても、識者は一人も之を信じる者はなからうが、不識者たる下級民は、滔々として關帝の靈力を信仰して居る。關帝は敵たる日本軍を其の靈力に因ておつばらつた云ふのだ、關帝を信仰する所の朝鮮下級民は、いつかは關帝の靈が顯現して、日本人を朝鮮よりおつばらふこゝが出来るとだ云信じて居る、之を信ぜば疾病を治し、願意は叶ふ云ふのだ、巫女の傳導思想決して之を輕視してはならぬ、幼稚なる宗教心の持主は、新しくして迷信郷より蟬脱するこゝは出来ない、不肖は往年迷

幾十百の信徒
の座業

信打破の必要を論じ、關帝廟の撤毀を高唱したが、此の方面に無心の當局者は、一向に考へても見ないやうだが、河潤數百里、一種の迷信思想は地平線下を潜りて、全朝鮮下級民族の思想を支配し傳導しゆくのである、筋は違へき近年朝鮮に於て、破竹の勢ひを以て其の教線を擴張しつ、あるものは、天理教である、天理教の布教所や、布教派出所のやうなものが、あちこちに澤山見受られる、そこを覗いて見るに、大鎌を鳴らし柝を撃ち、手やう目やうで、悪しきを攘ふて助け玉へ、幾十百の信徒が座業して居る。

不肖等は、此有様を見て落涙を禁じ得ない、内地人は朝鮮人を迷信の民族だ云よく評して居るのを聞くが、東洋の文化人として威張つて居る日本人が此の有様は何事か、而して段々よく調べて見るに、實に驚くべき。求が此の天理教の袖下に行はれて居る、布教所や派出所の主任云ふ布教者は、元は天理教の信徒であつて、現代生活の勤勉要素を欠き、天理教布教所の道場に幾年かを日参して、大分教税を拂つた人達である、それが愈々布教主任

さなるまでには、幾度か京都の本部に参詣して、稿の財布は空になり、最後に布教免状見たやふなものを拜領するのである。

それは素養もなにもない市井の雑人で、甚だしきは日に一丁字なき無教育の老婆なごも居る、斯様の者の布教が一體何ふなるご云ふのであらう、そこから透りに病人でもあるご、早速手を廻はして乗込むで往て、天理教を信心しさない、醫者の薬は飲まなくとも癒りますご云て、病人の枕頭に座して、怪しげな祈禱をする、茲に來つては日本人も實に憫れなものだ 文化を誇嘯するの資格がごこにある、斯様の者の布教所に日夜集まつて居る迷信徒は、換言すれば貧民思想の鼓吹者である、吾人は此の思想を排斥したい、我天理教は聖典であり、其の教義は精神界の鴻範ではないか、決して汚らはしき迷信を吹聴し、愚夫愚婦の淨財を絞るの専業ではない。

按ずるに、吾々高等動物の社會的生活に對しては、救濟博愛は最重要の社會的要約である、基督の博愛主義は、基督有りて始めて宣傳せられしもので

醫者の薬は飲
まなくとも癒
ります

社會に存在の
義務を盡しつ
とありや

なくて、釋迦の利他主義は三千年前より東洋民族に宣傳せられ、儒教に於ける仁も乃ちそれである、東洋優良民族の大部分には、此の靈はしき倫理心は存在して居る、即ち其の窮困者、生存競争の落伍者を救濟するは、その社會に生存せる強者ご富者の要約であるごは勿論であるが、其の救濟が強者富者の要約たる半面に於て、不肖等は次のやうなごを考へたい、乃ち吾々は吾々の社會を形成保育生長文化せしむる義務ある一人が、果してその社會に存在の義務を盡しつ、あるか何ふかである、之は社會に生存し奮闘努力し、比較的健全分子ごして社會に立てる人達が、大に研究せなければならぬ事である、不肖は吾々の此の社會に於ける貧民が、社會政策の缺陷や、經濟政策の拙劣より來る事も否認はせないが、迷信に沈溺して自家生活の勤勉要素を欠き、念佛祈禱に没頭して、貴重時間を空費し、奮闘努力の精神消耗せられ自己が此の活社會に存在の義務を果たし能はざる貧民に就ては、之を救濟するの義務を負擔するごは、忍び能はざるごである。

是等の迷信者は、遂に悠遊情弱に陥落し、他人の懐を食ひ物にせむとする如き、一種の貧民思想に墮落する、前篇に不肖は朝鮮の貧民問題を論じたが此くの如き墮落思想に對して金品を以て救済することは、此等をして益々墮落の淵に沈むるものであつて、何人も此かる救済は避けねばならぬ、思ふに信教は自由であるが、其の自由を楯にして迷信の害を放任することは宜しくない、此の種迷信不健全の分子は、今や滔々社會の微菌を爲つて、現に盛んに社會に害毒を撒布しつゝ、ある、不肖は文化政治の當局が、此の裏面を微細に觀察して、適當に取締の方法を設けむことを勸告せざるを得ない、若し散焉として世を押し移らば、文化の暗黒面に於て、懼るべき一種の思想が凝結し、遂には鳴りを打て社會の表面に妄動し來であらう。

迷信の害を放任するは宜しくない

第二十七篇 民族魂と同化の最後的研究 [一]

——余は諫國論千言を草す——
——眞の觀察者としての資格——
——朝鮮魂の生起と吳越同舟——

時の桂首相に獻言す

不肖は、二十年前、韓國併合の不可を論じ、諫國文千言を草して、時の桂首相に獻言す、其の稿は時の寺内統監に回送せられ、伯の譴責と慰諭とを受けたることあり、併合後不肖は我國家の大方針、總督府の政治政策に順應して、朝鮮統治を翼賛し、内鮮人は同化團結して大陸の一角に新日本を築成し一大文化を達成して、東力西漸の意氣を煥發せむことを鼓吹して居る。が朝鮮青年の思想は、滔々として反日本思想、祖國回復思想に傾き、今や牢固として抜く可からざるに至らむとす、總督府の丸山前警務局長は、曾て

總督府發行の雜誌朝鮮に發表して曰く。

「前略、結局朝鮮人が獨立を欲するならば、自分の力に依て之を遂行するより外ない云ふ自覺が、漸次擴まつて、今や何人がさう言つても、朝鮮上下を擧げて有つて居る思潮であらうと思ひます。

茲に自分の力に依らざるべからざる自覺を得て、さて自らを顧みる時に一部の人は進むで居るかも知れませぬ、或る種の階級は富を持つて居るかも知れぬけれども、一千七百萬の人間を平均すれば、其の文化の程度、其の經濟力に於て、個人個人の能力に於て、今直ぐ獨立すると言つて見た所で、到底獨立を支持するこゝの出來ないこゝに氣附くのであります、今日本が手を引いて、直ぐ獨立國として維持するこゝが出來るか、出來ないか云ふこゝを聞いて見たならば、總ての人が否云ふ返事をするより外はないのであります。

大部分の人々が此の觀念を持って居るこゝは動かない事實であります、私

到底獨立を支持するこゝは出來ない

共肝膽を吐露して朝鮮の有識階級、先覺者云稱する人、或は思想のリーダー云稱する人云會つて、獨立思想であらうが、何んであらうが、眞劍の意見を交換したいといふて、それ等の人々の意見をよく聴きましたが、如上の思想は當時から先覺者は皆竊かに有つて居つたのであります、併し當時は其の思想を發表するこゝが出來ない程、人心が不安であつたのであります。

然るに漸次人心が落着くに從つて今日全土を擧げて、この文化促進、實力養成云ふ思潮が深く朝鮮の人々の頭に這入つたのであります、此の現はれが今日の向學心勃興である、文化促進の爲めには、其の基礎である教育の發達を期せなければならぬ、之が向學心の盛んになつた所以であります、富を得るには産業を發展せなければならぬ云ふこゝろから、産業熱が勃興したのであります。

要するに落着いた云ふこゝは唯だ空理空論を戦はし、武力を以てやる

東洋永遠の幸
福の爲め

爆弾を以てやるに云ふ空騒ぎの夢から醒めて、實質的に着々進みたいに云ふこゝが、現代多く朝鮮人の腹であります、我國が朝鮮を併合して以來、朝鮮人の文化促進、實力養成の爲めには常に腐心せるにころで、産業上にも教育上にも、年々多額の費用を投じ、誠心誠意を以て計劃を進めて居る併合の聖旨にある通り、我々はお互に手を取つて東洋永遠の平和の爲めにも世界人類の幸福の爲めにも、一體に爲つて進まうぢやないか、其れが爲めには一日も早く朝鮮の實力が出来るこゝが必要であるから、歴代の朝鮮統治者は銳意此の點に努力して居るのである、然し私をして忌憚なく謂はしむれば、朝鮮人の大多數は、無智な何も分らぬ人が多ければ、之等の人を導いて行くに云ふ人の多くの主張は、文化を促進し、實力を養成したならば、成る可く早く日本から離れて、獨立しやうに云ふ思潮であるに云ふこゝは、我々の考へなければならぬ一つの大問題であります、同じ手段で努力して居りましたが、その目的は合體して共存共榮しやうに云ふ考

全朝鮮民族を
擧げて國を
復して盛
復思想旺盛

に實力を以て速かに分離しやうに云ふ考は、餘程かけ離れて居るにいはねばなりません、云々

丸山氏の觀察は徹底して居る、不肖も氏に其の觀察を同ふし、不肖の同化論も教化論も此の觀察は二十年前に獻白書として、桂首相の一考を求めたのであつた、顧みれば星霜の過去に爲れり、併合以來二十年の統治は、頼りに朝鮮の民智を開發し、其の産業は年と共に發展の趨勢顯著である、而して今や殆ん全朝鮮民族を擧げて、祖國回復思想は旺盛に養成せられつゝある、多寡を括り、樂觀せる者は、一種の催眠術にかゝりし盲者ならざれば、腐りかけた大和魂を抱いて虚勢を張るの痴人である。

丸山氏は、在任僅かに五六年間に過ぎざりしも、よく朝鮮人の上下に接觸して、よく朝鮮人の民族性格を觀て居る、朝鮮人の腹の中にも這入つて居つた、故に其の觀察は斷定的にして、疑問としての觀定ではない、凡そ朝鮮民族の要點を捉へて、その眞價に其の民族性格を鑑識せむに志さば、須らく十

眞の觀察

年二十年の間滯留し、觀察せなければならぬ、而して其の滯留其の觀察は財
 囊重くして、他に膝を屈せざる觀察者に非ずして、朝鮮の都會人とも接し、
 朝鮮内地に數年の腰を据へて、生存競争や生活の渦中に同棲して、朝鮮士民
 と飲食座臥交遊を共にし、之を順境に視察し、且つ之を逆境に察せる後ちで
 なければならぬ、其の男子と争ひ女子と戯れし後でなければならぬ、此くの
 如くにして始めて眞の觀察が出来、民族性格をも究むるこゝが出来るのであ
 る。

不肖等は二十五六年來、朝鮮の内地にも在住し、都會にも在住して、赤裸
 々として誠心を抛け出し、朝鮮人との飲食座臥交遊して居る、自ら其の經驗せ
 る所を筆にするに足るの資格を持って居る、自信して居る、故に動もすれば土
 着の朝鮮人よりは朝鮮及朝鮮人を批評し、觀察するに適して居るかも知れぬ
 素通りの旅行者や、二年三年の滯留者が觀察したる結果の言ふ所は、其の
 實賢に於て大なる相違が生ずる場合が多い、故にそれと等しく信じ難きは、

思想動搖の形
 跡は毛頭も御
 座なく候

統計を基こせる斷定、科學的方式を基こせる斷定である、此等の表及方式は
 朝鮮民族の精神中に現實に何事の行はる、かを毫も語り得ざるからである。
 此の言の誤まらざるを證明すべき實例は、滔々として其の數を知らず、今
 其中より標準的の一例を採れば、大正八年三月の朝鮮騷擾である、其の一
 箇月前長谷川總督は、各道長官に照會して、歐洲戰亂後平和會議に於けるウ
 イルソン氏の民族自決主義唱論が、朝鮮士民に如何に響いてゐるかを知らむ
 させしとき、各道長官は異口同音に其の管内の民心は無事にして、思想動搖
 の形迹なきは毛頭も御座なく候と報告した、然るに其の報告の來りしより半
 月を出でずして、前代未聞の革命的大騷擾を勃發した、實に何人も及ばぬ迂
 濶を示して、將に來らむとする脚下の禍を感知するこゝは出来なかつた。
 之れ短時日に得たる粗雑の觀察を基こせる地方長官の斷定は、無効なる事
 實を證明して居る、況んや他の旅行的視察者の觀察をやである、譬へ如何な
 る聰明慧敏の政治家でも學者でも、其の明哲なる眼識を以てするも、此の數

に漏れざるは勿論にして、眞の観察者としての資格を具備せるものは、朝鮮の都鄙に長期の居住をなして、行住座臥飲食交遊朝鮮人に接觸し得るに同時に、其の風俗習慣典例に通曉し、その歴史に通曉するものでなければならぬ。朝鮮民族過去の歴史は、其の民族の現代の特質、特性を説明すべき參謀本部にも云ふべきであるからである、論じて茲に來れば不肖は先づ朝鮮人を論じ得るこゝの資格あるを前提に置き、朝鮮民族魂を論じて、文化政治下の難題たる同化の最後的研究に移るであらう。

史を按ずるに、朝鮮民族の古代文明は、僅少なる一部階級の思想に基因するに非ずして、朝鮮の制度、文學、美術は一般的にして、民族全體の思想より胚胎し來りしものであつた、勿論其の文明の輸入は、少數の兩班儒生に依りてなされたるに過ぎざるも、其の文化の廣通は全民族の力にして、決して一部少數の階級の力ではなかつた、此の文化の思想普及には成立頗る遅々たりしも、其の朝鮮文化の消滅に歸するこゝも亦頗る遅々たるものであつた、

朝鮮人を論じ得るの資格

一の新思想を鼓吹するこゝも難事に屬すれども、一の思想を破壊するこゝも亦決して容易の業ではない、人類は古今東西を問はず、死せる思想を歴史に懸着して、一種の痼疾をなすは如何にもするこゝが出来ない。

今は早や八九年の昔を爲れり、朝鮮騷擾の當時、齋藤總督と共に來鮮したる政務總監水野鍊太郎氏は、法學者なりしと共に一種の哲學者であつた、氏は朝鮮民族の歴史、そが心理的組織の變遷及遺傳の法則を眼中に置かず、内鮮人の平等思想と不平等性の平等を政治の上に求めむとした、實に迂濶千萬な話ぢやないか、氏は内鮮人の不平等思想や其の性格は、畢竟是れ教育相違の結果に過ぎずと呼張し、人間は孰れも智徳平等的に生まるゝものにして内鮮人の變性は結局制度の罪なりと思考したのであつた。

故に水野氏の矯正策は極めて簡單にして、制度を改正して一視同仁とし、朝鮮民族に内地人に平等的教育を施せば、不平等思想と性格は、拋棄して、内鮮人は融和同化するであらうと考へた、朝鮮を治めむとする政治家の簡單

平等思想と不平等性の平等

明瞭なる、不肖等は啞然として悲觀せざるを得ない、朝鮮の民族思想は數千年來、朝鮮民族間に於て牛歩遲々、積年累代の遺傳に依りて涵養されたるものにして、日本人が日本民族に適當せる制度も教育も、朝鮮民族自體より觀れば、或は有害なるやも知る可からず、然れども水野氏是一種の哲學的見地に於て、朝鮮に數千年來遺傳したる性格を、朝鮮人思想を誤想し認めて、制度を教育の力に依りて之を絶滅せむことを期した、何ぞ云ふ皮相なる觀察の結果であらう。

日本民族及朝鮮民族は、その容貌骨格に於て、勿論同種の關係にあるは言ふを俟たない。此の點より論ずれば、支那人も同種であることに依りて敢て區分は立てられぬ、然れども其の民族はその感覺する方法、其の行動する方法に於て、大に相違する所あるのみならず、其の風俗習慣言語に於て相違し、遂に其の民族性に於て大なる相違を齎らして居る、故に其の心理的差別は何人も容易に之を看取するこゝを得べく、其の歴史に於て明かに其の差別は記

數千年來遺傳したる性格

日本人の過去に於ける一切の精神的綜合

載されてある、故に朝鮮民族の宗教的信仰、教育、美術、生活、行動、政治的騷擾等の背後には、朝鮮の民族的性格より來る一種の靈魂、即ち朝鮮の民族魂があるのである。

日本人の大和魂なるものも、日清、日露の二大戦役當時に突發したる魂では決してない、二千五百年來其の風俗、習慣、其の行動が、精神中に固く根帯を据へ付けたるものであつて、大和魂の組成を見るまでには、日本人は非常の訓練を経たるものにして、日本人の過去に於ける一切の精神的綜合であつて、其の祖先父祖の大遺産である、朝鮮魂も即ち其の優劣は兎も角として朝鮮祖先よりの遺産であることは勿論である、此の民族的魂なるものが、制辰や現代的教育の力に因りて、變更し得らるゝものであらうか、凡そ現今に於て其の社交行動の上に、其の民族性の相違は餘り顕著には兩民族の上に反映せぬかも知れぬが、滯留久しく其の行住飲食座臥に於て、其の民族性格は顯然に分離する、吾人は父母の子であり、歴代祖先の苗裔である、而して同

一の縣郡村住民は、必然的に其の祖先を同一にし、郷土を以て吾人の第二の母と爲す所のものは、管に感情のみに非ずして遺傳も亦然りである。

大和魂にせよ、朝鮮魂にせよ、其の民族の心的組織の成立は、實に二千年三千年の歳月を要して居る、即ち感情を同ふし、習慣を同ふし、言語を同ふし、信仰を同ふするまでには、實に永き年代を訓練を経て居る、加之同一島國內に於ける利害の共通が、之を助長して居ることも争ふ可からざる理由の一つであらねばならぬ。

朝鮮人祖先の遺産たる朝鮮魂は、後人の墮落に因りて從來腐れ切つて居つた、従來の朝鮮民族は兩班階級の跋扈と、政治の腐敗に因りて、共通的感情は連鎖ありても、思想も信仰も死灰の如くに冷却し、極端なる個人主義に陥落して、朝鮮魂は久しき病床より起き上ることが出来なかつた、大和魂は最初は個人の家庭より發祥したが、漸次に村落、都市へも發展して、遂に一國に於ける集團的魂と爲りて、日本帝國國民全般に普及するに至つた、日本人

永き年代と訓
練

病床中に疲弊
せし朝鮮魂

の國家的觀念なるものは、即ち大和魂の集團である、然るに朝鮮魂はオンドコの片隅に幾世紀かを病臥し、心身既に疲弊し切つて居つた、此の疲弊せる魂は國家魂の組織せらる、時に非れば、若くは非常の國家的革新の機に遭遇する時に非れば、斷して生起することは出来ない。

果然大正八年の朝鮮騷擾に於て、久しく病床中に疲弊せし朝鮮魂は一齊に生起した、當時に於て此の魂を内鮮綜合に善導生長せしめ得る所の、毅然たる具眼の政治家があつたならば、朝鮮魂は大和魂に附隨して、幾何か同化の進路を辿り得たかも知れぬが、朝鮮民族の主觀的觀察を誤まりし我政治家は遂に朝鮮人の魂を囚ふるこゝ能はずして、排大和魂的に其の生起と生長を背進せしめてしまつた、吳越同舟の感深しと謂ふ可しだ、他日朝鮮を縣政とし都市若くは小都市より自治制を施行する域に達したるべき、朝鮮人は極めて固定的にして、朝鮮的魂を具するに至るが故に、日本の國家魂を組成するこゝは、殆んき不可能にして、日本民族の多數移植に因りて其の融合が譬へ行

はれ得べしとするも、それは幾千年の永き歳月を要する善良の政治と、經營の結果に俟つに非れば、其の大體の効果をさへ收め得まい、不肖は羅馬の如き好癖の大帝國が、興亡共に極めて速かなりし原因を標題として、之を研究私論せざるを得ない。

第二十八篇 民族魂と同化の最後的研究 (二)

——齋藤子の雜婚政策を危ぶむ——
——内地人も朝鮮人も大覺悟を要す——

齋藤子の雜婚政策を危ぶむ

齋藤子は、朝鮮人同化を内鮮人結婚に因りて、其の光明を發見せむとせらる、こゝは、不肖は前篇に之を論ぜし如く、朝鮮人教育の不徹底と、以上本論に述べし理由に依りて、之を危ぶまざるを得ない、加之齋藤子は「生理學上雜婚政策が果して優秀なるや劣悪なるやは、一律に判定し難し」と云はれし

雜婚に依て出産せる兒童の狀態

が、其の判定し得られざる所に、不肖等は大きな悩みを感じざるを得ないではないか、譬へ優秀ならざるまでも、劣悪であつては到底それは問題にならぬ。

然らば之を事實の上に徴するの外はない、按ずるに既往及現今に於て、内鮮人の雜婚は滔々頻々に行はれて居る、がそれは内地人の女が朝鮮人の男に嫁するもの多く、朝鮮人の女が内地人の男に嫁するものは、至つて少ない、朝鮮人の男に内地人の女が嫁して、其の出産せる兒童の狀態は何ふであるか、學校の成績に於て先づ彼等は、純朝鮮人夫妻の交合に依て生れたる兒童に比し、非常に劣悪である、又内地人の男に朝鮮人の女が嫁して、其の出産せる兒童の狀態は何ふであるか、學校の成績に於て先づ彼等は、純日本人夫妻の交合に依て得たる兒童に比し、非常に劣悪である、而して長じて社會に處しては、生存競争の落伍者であり、多くは不良分子と爲つて居る、それは家庭構成の分子が其の風俗に於て、其の習慣に於て其の表情する談話と感情の交

響微妙を缺ぐ點に於て、劣悪なる兒童を製造するかも知れぬが、不肖は其の大なる原因は之を混血に歸せむとするのである、試みに讀者は内鮮人雜婚の結果に就て御覽になるのが捷徑だ、不肖は斷して諸君に誣ゆるのではない、間には普通のものも出来るかは知らぬが、それは言語風俗習慣に於て、同化したるものであらう、不肖の見聞せし範圍に於ては悉く劣悪である。

不肖は博物學者でもなければ、生理學者でもないから、其の適確なる理由を發見するこゝは出来ないが、それは共通的感情や思想、傳説を異にし、風俗習慣を異にし、遺傳的信仰の連鎖が無くて、別箇に形成せる魂が接觸するからであらうと考へられる、佛蘭西の學者故チエーソン氏は、統計を立てて曰く。

佛蘭西には毎百年を三代の割合にて、吾々各箇人の血脈中には、少なくとも一千年間に於ける二千萬人の血を留存すべしと云ふ、されば同一の土地同一の郡縣の一切住民は、必然的に其の祖先を同一にし、同一の土を以て

不肖は博物學者でもなければ生理學者でもない

混血兒と云ふ痕跡は認められぬ

塑造せられ、同一の印象を刻して、己れ自らも最終の一環たるに過ぎざるこの長大なる連鎖によりて、絶へず普通主性に歸着せしめらるゝものなり吾人はわが父母の子たるを同時に、わが種族の子なり、郷土を以て吾人の第二の母と爲す所のものは、皆に感情のみに非ず、生理も遺傳も亦然り」と論じて居る、之は實に同化論者の等閑に付す可からざる事であらねばならぬ、齋藤子は

「日本内地に於て金ミカ、高ミカ何ミカ名乗つて居る家族を尋ねれば、大抵朝鮮から渡來して居る、而して其の家其の人が、何等の相違もなく立派なる、日本人ミ爲つて、混血兒と云ふ痕跡は少しも認められぬ、蓋し其の容貌、骨格、血涙までも其の源は同一にして、少なくとも頗る同化し易き自然の天賦に由るものたるは疑ひを容れざる所である」

ミ云はれしが、古へ以來朝鮮民族の血統は混入して居るこゝは否認はせぬが我大和民族の中に混入せる僅少の朝鮮人の血統は 國土自然の雄美と秀麗と

に醇化され、日本の大民族は訓練されて、二千五百年來、或は一十二三百年來立派に濫化されて、日本民族として其の血統を共通し、種族魂即ち大和魂に醇化せられたる血統を構成して居る。

日本人の感激性に富む所以

大陸半島の朝鮮人も亦大陸半島の山川風土に其の氣關氣に因りて、立派に一種族の血統を垂れて長生瀟蕩して居る、往年理學博士小藤文次郎氏は、日本人が感激性に富むは、海島中大氣の濃厚に因り、大陸の支那朝鮮人が、感激性に乏しきは、大氣の稀薄から來て居るに云つたことを記憶して居る、眞に左様であるかも知れぬ、然らば日本民族の血統に、朝鮮民族の血統は分立二千五六百年間に於て、其の國土山川の秀麗に大氣の濃厚に、其の山川の平凡に大氣の稀薄に因り、或は其の民族の精神的鍛鍊に、否らざるに因りて、全然分離したる別箇の血統を垂れ、其の民族魂を養成したのである、日本人が世界に比類なき大和魂の集團的「力」を有し、全地球上の民が、今日我大和魂を賞讃する所のものは、其の純清血液の凝結したるものが、遺傳

同化難の最大原因

に精練に歴史に因て濫化されたるものにして、即ち武士道に任俠道になつたのである。

顧ふに、神代に於ては同一圈の民族であつた内鮮人も、數千年の長き歲月の間に於て、大和魂に朝鮮魂は積極に消極に背進してしまつた、そして日本人に朝鮮人は容易に改編同化し難き民族性を育成した、特に大正八年の騒擾以來は、民族魂の背進は激甚である、此の民族魂の相違、換言すれば血統の相違が、兩民族同化難の最大原因である、之を結婚政略に依りて濫化し同化しやうにしても、それは當局が同化策の理想に過ぎずして、言ふ可くして行はれまい、而して其の人情風俗習慣の異なる點に於て、現在の如く、結婚しては離婚し、離合集散は免かれ能はず、此の方面に内鮮人男女に其の家庭に於て、其の離婚より來る著しき溝渠の築かる、こゝは必定である、不肖は今内鮮人の結婚の悲慘なる一例を擧げるであらう

茲に京城に一人の朝鮮人紳士あり、今其の名を秘す、今を距るこゝ十幾年

夫人の遺書をも尊重せず

前、内地に留學して一人の内地人を娶つた、爾來數人の兒を生むも入籍せず、近年若き朝鮮夫人を娶り、十數年同居して數人の兒を挙げたる内地人は之を別居して閑ひ物とした、其の人は妾として遇せらるるの冷酷に堪へず、其の内地人夫人は前年數兒を遺し、一人の乳兒を抱いて入水自殺をしてしまつた、其の遺書に葬式は本宅より發し呉れよとありたるも、其の夫君は十數年同棲の夫人の遺書をも尊重せずして、之を別居の閑ひ家より葬送した其の夫君は人に優れし識者である、冷淡水の如く悲愴言語に絶した行爲ではないか、夫人の靈魂今尙其の本邸に飄蕩せむ、之れ實に風俗習慣人情の相違ミ、其の感情の非交響より來る結果であらう。

又一人の紳士あり、其の名を秘す、其の人は内地の某醫學校出身にして、現に某醫院に奉職せり、其の父君は其の子の卒業をも待たずして死亡した、不肖は其の父君は懇意であつた、父君の死後學資の出所に窮し、中途にして退學せざる可からざる運命に逢着せしを以て、不肖等懇意の者五六人は相

之を誹難するは無理であるかも知れぬ

談して、毎月六七十圓の留學費を送つて居つた、期に至り學業を終へて京城に歸りしが、當時一人の内地人夫人を帶同した、蓋し留學中に既に婚を結びしものにして、久しからずして一兒を挙げた、然るに其の紳士は久しからずして一朝鮮夫人を娶り、内地人夫人を冷遇虐使し、目もあてられぬ悲愴を極めつ、ありと聞く、之れ實に感情の非交響ミ、風俗習慣飲食座臥趣味の異なる結果であることは勿論である、之も久しからずして悲愴な最後を見るであらう、之を誹難するは或は無理であるかも知れぬ、鮮人夫人を娶りし内地人にしても、こんな事が行はれて居るであらう、要するに風俗習慣其他幾千年來、其の血統を異にしたる二箇の異なる魂が交婚して、満足なる家庭を築き、満足なる子孫を挙げ得やう道理がない、然らば不肖は茲に更に一步を進めて研究せなければならぬこゝがある。

史を按ずるに、古へ羅馬帝國の隆盛なるや、彼は幾多の小弱野蠻國を併合して、羅馬大帝國を築いた、當時何人が果して羅馬の衰亡を豫想せむや、我

大日本帝國今日の隆盛を以て、何人か果して將來其の老衰を豫想する者があらうか、羅馬が衰亡に至るまでの歴史を調査すれば、それは種々の原因は伏在するであらうが、最も有力なる原因を認めらるゝものは、雜婚政策に基因する羅馬最良種の絶滅である、換言すれば純羅馬民族の頹廢である、羅馬の異民族を征伏するや、彼は實に極端なる同化政策を採り、其の領土内に包擁したる異民族を遇するに平等にして、其の文化の程度を民族性の如何に頓着なく、一齊に市民權を附與し、異民族との結婚を奨勵した、宛かも齋藤總督の同化政略上、内鮮の結婚を奨勵されしに同様だ。

羅馬人は、國家の繁榮興隆に有頂天を爲り、羅馬大帝國主義は四國を風靡した、我日本帝國の興隆は實に羅馬帝國興隆の當時に髣髴たるものがある、而して其の政治政策も全く羅馬の統治策に同軌にして、加ふるに其の雜婚政策は、其の理由とする所符節を合す如しである、然るに羅馬の興隆する半面に於ては歡樂主義勃起して、淫逸奢侈の風盛んなるに至り、眞の羅馬民族の

異民族を遇すること平等

朝鮮民族の純血統

繁殖力は著しく減退し、且つ基督教の普及するに従ひ、獨身主義者の數を増し、純羅馬人の優良なる血液は殆んど消滅し、異民族の數は益々増加し、羅馬人の純血は汚濁せられ、羅馬人の純一性を喪失してしまつた、之れ實に羅馬帝國の衰亡したる最大原因である。

前にも述べし如く、大和民族と朝鮮民族とは、幾千年の間に於て、其の血統は全然分離してしまつて、今日の日本には大和民族の純血統が残り、朝鮮では朝鮮民族の純血統が持續されて居るのである、されば内鮮人の民族精神なるものは、此の分離したる血統に由て、歴然として其の民族魂に相違を來して居る、此の民族的魂なるものが、文化政治の制度變更や、齋藤子の結婚政略に因て之を改竄し、其の改竄したる朝鮮人の魂を囚へ得るであらうか、之は實に容易の事ではない、齋藤子も個人に於て、果して一人の朝鮮人の魂を囚へ得たであらうか、齋藤子の結婚政略は將來我國體に龜裂を生じ、羅馬大帝國の轍を踏むことなきやを憂慮するものである、斷定ではない即ち

制度變更の文
化政策

憂慮で、元來我日本人の誇嘯する所のものは、前にも述べし如く、大和魂である、大和魂は今や全地球上の民族が賞讃する所のものである、此の全世界の賞讃を受くる所の大和魂なるものは、一朝夕に凝り固まつたものではない、民族の勃興する所地勢良し、二千五百年來太平洋の波濤に、富士の秀靈に洗禮され、武士道に任侠道の凝結したる、雄偉秀靈の大自然に鍛錬し來りし精力の賜である、それを齋藤子が制度變更の文化政策に由て獲られやうなき、考へられたこゝは、大きな間違ではなからうか、極東海上彈丸黒子の小乾坤に生息せる日本人に、偉い所のものは唯一の大和魂だ、日本人より大和魂を取り去らば、印度人や支那人も一向に異なる所はない、論じて茲に來れば大和魂に朝鮮魂は果して同化の時期が有るであらうか。

又支那及朝鮮史を按ずるに、支那大國は二千年來朝鮮都督に失敗して居る漢の武斷的統治も、唐宗時代の文化的政策も、元の武斷主義も、明の文化政策も悉く失敗して、清國は遂に獨立を許すの己むを得ざるに至つた、朝鮮は

朝鮮の大方針
は一定不動

瘦せても枯れても極東の一大舊邦だ、有史二千載の歴史を有し、二千萬の大民族を有して居る、新教育を受けて精神的に物質的に民族思想が開大して來れば、朝鮮魂は大和魂に對抗して來る、否な明かに對抗的思想が顯現して來た、同化思想なきは樂にしたくもない、齋藤子八箇年間の文化政治に於て、讀者は明瞭に此の現象を目撃せらるゝであらう。

然れども、併合以來帝國の公明正大なる政治は、坦々たる軌道を往くが如く、朝鮮の大方針は一定不動にして、而して齋藤子の文化政治が内鮮人の同化に積極政略を採り來りし今日、其の政策に政治に反對しやうなきは夢にも思はぬ、不肖は帝國治朝鮮の方針に隨伴して、流れに従つて白波を揚ぐるのみである、以上の議論は只不肖が佛蘭西學者の民族魂の遺傳を讀み、羅馬興亡の歴史を讀むで、其の研究しつゝある所感を私論するのみである、内鮮の識者、井底の痴蛙憂慮に過ぎたりと笑はば、不肖の狂悖は之に過ぐるものはない、唯だ不肖は内鮮人の現状に於て憂國の情禁せず、私に研究しつゝある

ものを發表して、内鮮人の参考に資するのみだ、不肖の私論が不當であり不都合であれば、何時にても之を葬むつて、喜んで識者の高説に従ふのみだ。要するに、内鮮人は此の至難の事業を突破し、一時混血に因る民族魂の頹廢を餘儀なくせらるゝ、こゝありまして、千年の後立派に濫化された血統に依り、打て一丸とせる大日本民族魂を更生するこゝが出来らば、蓋し至大の幸福だ、其の間西力の國難來なく、天下は無事であつてほしい、末は大海を爲る山水も、一時木の葉の下潜るこゝは己むを得ないこゝしやう、日本人も朝鮮人も、今日に於て大覺悟を要す可きである。

打て一丸とす
る民族魂

第二十九篇 朝鮮縣治論 [-]

一、縣治の前に論ず

二、縣治の統制を説く

不肖は前篇に於て、民族の心理的性格乃ち民族魂は、一大固定性を有するこゝ、而してその固定性は歴史の教訓と、遺傳的蓄積に因るこゝを説けり、然れども其の遺傳的蓄積は、千年にして之を變性し同化し能はざるに非ざるこゝをも論述した。

然らば朝鮮人の民族的固定性を變化するの要素は、我總督政治が一定不動の方針と、臨機應變の政治政策に俟たざる可からざるは、自から明瞭である不肖が前各篇に述べたるものを綜合して之を論ずるときは、生存競争、産業自由競争、科學及農商工業の進歩、教育及信仰の發展に俟ち、其の發展の勢

民族的固定性

力の根本を以て、同化力を發揮せむとする日本人の手中に歸せしめざる可からざるは、蓋し己むを得ざるの趨勢に理由あることを否認することは出来な
い、斯くて一千年の長年月間に於て、内鮮の民族魂が融化し、其の文化が科
學、文學、經濟、哲學等の範圍に於て、内鮮一體の根本的思想を造ることを
得ば、是れ大陸に於ける日本人及朝鮮人の一大成功にして、空前絶後の光輝
ある大文化國を創設し得たりと誇嘯するべきが出来るのである、不肖は此の
新思想が逐年兩民族の間に採用せられむことを希願し、慶賀せむとするもの
である。

若し民族魂より出發せる舊思想が、絶對的に不變不動なりとの觀察が適確
に出来るならば、不肖等は我朝鮮統治に向つて、其の政治政策に一大革新を
絶叫せざる可からざるの己むを得ざる理由あることを宣言し置かむとするも
のである、蓋し世界先進國の歴史は、新領土の同化に始終して、其の同化を
達成し能はざる最後の國民は、其の嚴然たりし母國を滅亡せしめ、或は衰頹

空前絶後の光輝ある大文化

指動及煽動の思想

廢墟を殘留するのみであるからである。

惟ふに朝鮮舊社會の理想が再び勃興して、極東の天地に日本帝を分離し
て、其の勢力を争はむことは、何人も想像し能はざる事にして、之を夢想し
妄想して、其の文化的勢力を消耗し、内鮮新文化の制度を傾倒せしむること
あらば、民族の不幸不福之より大なるものはない、朝鮮現在の状態に於ては
上流と中流と下流とに論なく、擧つて祖國回復の思想鬱勃せり雖も、不肖
熟々之を考へ微細に之を觀察すれば、此の指導及煽動の思想は極めて少數の
識者に於て、其の牛耳を執られつ、あることを感覺せざるを得ない、即ち少
數上智の宣傳者ありて、極めて多數の中智と下智とは之に習育せられつ、あ
る。

是等の宣傳者は、其の信仰の勢力と筆劍の權威とに因りて、一大威信を保
ち或は保たむとしつ、ある、中智下智の民族の大多數は、併合の理由を論證
より承服せしめらる、ものに非ずして、祖國回復を云ふ斷定的權威に依りて

其の舊思想に戀着心を勃發しつゝ、あるものである、憫れむべきは少數宣傳者以下の民衆であらねばならぬ、彼等は舊朝鮮の宗教的思想は、既に其の勢力の全部を失つて居るものである、而して新文化の組織や社會制度は、内鮮人一體の進化的思想に依りて、何事も長足の進歩を爲し、今や科學的思想をさへ成立せしめむして居る新時代に逢着して居る。

少數の識者、僅少の宣傳者は、着々全鮮の民衆を感動せしめ、祖國回復を云ふ思想に囚へて、既に成功の道程にある、而して更に滔々として新宣傳者を養成したるべき、茲に始めて鞏固にして凝結したる、集團的思想が勃發するのである、總督府當局は、此の少數宣傳者、僅少なる識者の心を囚ふることに努力せなければならぬ、當局が之等僅少なる宣傳者識者の心を囚ふることはすまじせば、何人が果して二十萬民族の心を囚へて、之を同化し融合せしむることが出來やう、現在に於て之が至難なれば、將來は益々至難である十年二十年後は愈々以て大至難であらねばならぬ。

少數の識者僅少の宣傳

朝鮮を我府縣制にする

然れども文化政治は、一定の軌道を悠々調歩して進むで居る、目に狐狸の囀るを許さず云ふ意氣で進むで居る、最後の目的は教化に、一視同仁の總政に因りて、有終の美は收め得られやうと考へて居るやうだ、それもよからう先づ既定方針に準據して、やれる處までやつて見るのさ、いけなかつたら其の時の事だらうと、かう呑氣な事も云つて居れぬが、筆政に従ふ吾々は、之れ以上何をも致し方が無いではないか、茲に於て不肖等は、文化政治の運用に鑑み、一步先に進むで、近き將來に於て、朝鮮を我府縣制にし、十年後の將來に於て、我自治制度を確立し、大日本主義を以て朝鮮を覆ひ、王道を宣布する一面に於て、嚴正なる威力を發揮して、鳴かずむば鳴かせて見やうと云ふ意氣を以て進むで見やうではないか。

惟ふに朝鮮人は壓制と教育との間には、大なる差異あることを自覺せなければならぬ、朝鮮統治の主眼の目標は、朝鮮人の教育と産業の開發にあり、朝鮮人が常に口にする日本政治の壓制と云ふは、朝鮮民族は永年支那の屬

後 壓制政府の最

と、其の誅求下に生活し征服者は征服者に次で起り、朝鮮人特立の政府を見たるこゝに稀に、事毎に大國の容喙を操縦を免かれ能はざりし因襲的觀念に囚はれ、併合以來自由を民權の伸張せし統治下に生活せるに拘はらず、壓制を口にするは、其處に何等の事實を根底を證明したるものに非ず、日本帝國は實に過去に於ける朝鮮の壓制政治を統合して一になし、壓制政府の最後に於て、併合に依り特立せられたる政廳が、朝鮮民族をして善良に且つ安全ならしむべき條件を完ふするまでに、朝鮮民族を養成するの任務に當つて居る、朝鮮民族は前代未曾有の自由を得、其の自由は通り越して、往々不正當の自由まで叫びて居るではないか。

齋藤子は、將來機會を見て市町村の自治制を布かむことを宣言せられたるは、將來民心の安定、社會の整理、教育の向上、産業の開發、交通の發展等の實績に照らして、地方政治の權力を人民に與へて、人民をして朝鮮の政治體を分擔せしめむとするの理想であつた。

兩班のみが公共の事務を担

按ずるに、朝鮮の社會は中古以來不平等なる階級によりて組織せられ、貴族と常民と白丁なる階級を生じ、人間の境遇は全く其の出生の如何に從屬して居つた、宛かも我封建時代、武士と町人百姓の階級的境遇と同様であつた而も時人は其の生れたる境遇にあるの自然なるべきを信じて、更に怪しむ者はなかつた、上流社會の兩班貴族は其の數極めて寡少なりしも、政權を握り社會上の特權を握り名譽を有し富を存せしは、兩班のみにして、兩班のみが公共の事務を指導して居つた、日本に於ては六十年前に此の階級組織は、痛く先覺者の攻撃する所を爲り、主として之を排せしは、憂國愷世の先覺文人たる、吉田松陰や頼山陽であつた。

彼等は王政の復古を主唱し、而して自然が平等ならしめたる人間を、人為的に不平等ならしむる社會組織は不正當なりと叫びだ、人民の最大多數を卑下窮困の境地に置きて顧みざるは不仁の極なりと主唱した、我明治の維新は此の先覺文士の主唱に天下の士民が奮鳴したこゝに因て、一大革新が行はれ

大膽不敵の主唱

たのであつた、而して民主的又は平等的なる一種の感情が形成せられ、自由平等主義的理想は、中流階級以上の武士を除き、天下の最大多数の士民に由りて行はれた、然れども財産や名譽や權力の平等は、これ己むを得ざるものなりとて、敢て之をも排斥しやうとするの過激思想は勃發せなかつた、只位置の出生のみに依りて定められる可からざることを求むるに止まつた、之れ我日本の當時に於ては、實に大膽不敵の主唱と敢行とであつた。

併合後の朝鮮は、我明治維新の革新と同様に於て、少数の兩班階級は、常民の勃興に依りて閑息した、現今の朝鮮人にして新教育を受けたる人達は、多くは常民の子弟なれば、常民の勃興に就ては、我維新後の平民が勃興せしが如く、有力に平等思想を鼓吹した、而して今日の朝鮮人は、日本内地人と同じく全く法の前に平等に立ち、租税は平等に負擔し、裁判は平等と爲つた此の平等の習慣は今全鮮の士民を一瀟千里に風靡し、常民の子弟は兩班の子弟と同一様の教育を受け、貴族等は其の爵名は保存するも、貴族ならざる

朝鮮民族の生活組織

ものご親睦の生活を爲し、宴會に招待し、之に臨む者も昔日の如くに其の素性の何たるを問ふ者はない。

此の革新の急激なること、殆むご我日本内地の維新後の革新の速かなりしと同一軌である、現今、我は兩班なり、我は前觀察使なり、前郡守なりと云ても、此の平等思想の前には、何等の權威も何等の壓力も感ぜずなりて、朝鮮の社會は全く茲に一變して、日本内地と同様の社會制度の實現を見るに至らむとして居る、茲に於て朝鮮民族の生活を組織する一切のものは、農業にまれ、工業にまれ、商業にまれ、學問藝術にまれ、政治的習俗にまれ、朝鮮語のみを除きては、全く日本の爲つた、斯くの如く内鮮連結の實現せる以上は、日本帝國の内治政策として、速かに朝鮮の道治を縣治とし、其の行政官廳たる道廳を縣廳と改稱し、追て十年後に來るべき、自治制度確立の準備に着手せなければならぬ。

然れども我殖民學者は、動もすれば朝鮮を植民地として取扱はうとする所

に、帝國が朝鮮統治の理想を、大なる矛盾が起つて来る、曾つて不肖等も朝鮮は我帝國の植民地として取扱ふが至當だを考へたこともあつたが、帝國の治鮮大方針を、齋藤子の文化政治は、王道の發露を最も明確にし來り、朝鮮は内地の延長したるものとして、聖天子の朝鮮統治は一視同仁の内鮮人無差別なることを、高く宣言された。

然らば、識者のよく言ふ所の内鮮共存共榮にも語弊がある、それは我識者が朝鮮を植民地扱ひするより起る錯誤の文句だ、共存共榮を云ふことは、支那にでも對して用ゆる文句で、内地延長下に生息せる内鮮人に、他人行儀の文句は不都合であらねばならぬ、内鮮人は徹頭徹尾兄弟姉妹の間柄である、我朝鮮統治の根本方針はそこに基調して居ることを、忘却してはならない、朝鮮統治の政治政策は、土地と人との同化、産業と教育の同化、風俗習慣の同化に依りて、一家國の實現を期待して居る。

然るに、我殖民學者や政治家が、朝鮮統治の大方針を、内地延長主義の政

共存共榮にも
語弊がある

内地延長の現
實的感情

治政策を無視して居る以上、日本内地の日本人には、朝鮮は我植民地也を云ふ感情を切り棄てることが出来ない、實際内地に於ける日本人の頭には、内地延長を云ふ感情は動いてゐない、苟くも朝鮮統治の方針が、内鮮人一體論に歸趨する以上、此の感情は一日も早く内地人の頭に刻み付けねばならぬ、然らざれば朝鮮統治の精神的事業に於て、事毎に矛盾と撞着が伴つて來る。齋藤總督は、來任の劈頭に於て、内地延長の現實的感情を内鮮人に與へむとして、斷乎として内鮮文政を連結し、内鮮産業の同化を達成せむとして、海關稅なる障礙物をも撤去された、そして内鮮共通法や内鮮雜婚策を採られたことは、既に從來の我治鮮策に一步も二歩も先に進むで、併合の大方針に一直線に邁進された、而して整理に開發に在任約九年間に於て、一通り文化事業の經緯を策定された。

往年併合の當時、大隈侯は朝鮮なる貧弱紊亂の社會整理を、其の産業の開發交通の發展には、五十年は見つて置かねばならぬを云はれたが、併合後二十

治
事
の
理
想
的
事
業

年に過ぎずして、既に今日の如き整理に加へて開發を見たことは、實に意外の成績云はねばならぬ、社會の整理、法治主義の健在、産業の發達は、朝鮮人民に大なる安定を與へたが、騷擾以來は鬱勃として祖國回復思想動き、内地人との對抗心が旺盛に助長されて來た、此の思想の動く所は、總て或る期間に民族運動の形式を以て現はれるかも知れぬ、が本篇には重ねて思想問題論は論じない、そして直ちに我治鮮の理想的事業に突進して、要領を得たいと考ゆるのである。

惟ふに内地の延長せる朝鮮、之れが朝鮮統治の根本的感慨の原動力である内地人は前にも述べし如く、學者も政治家も、朝鮮を植民地として取扱つて居る、故に日本内地人は朝鮮を他國の如く心得て居る者もある、朝鮮人云へば植民地人の如くに考へて居る人も多數に居る、それは内地人ばかりでない、朝鮮人でも地方邊陲の人たちは、朝鮮人が文化するまでは、日本政府が統治して呉れる、そして其の晩は朝鮮は獨立するのだと濟まし込むで居る者

日本内地を基
本とせる縣政
の統一

も多數にある、斯様なことで何ふして統治の理想が達成されやうか、内地人にも、朝鮮人にも朝鮮は日本帝國の延長也、朝鮮人は日本帝國の臣民也と云ふ裏書をして見せぬと、承知せない云ふ有様では、實に心細さを感じざるを得ない。

内地の延長せる朝鮮云ふことを、形式の上に將た實質の上に於て、内鮮人民に感慨を與ふることは、方今の急務である、既に今日の如く文化し來れる朝鮮としては、最早何事も躊躇することはない、日本内地を基本とせる縣政の統一を斷行す可しだ、道治を廢して縣治に變更す可しである、内鮮の行政が一途に出で、縣制市町村制が統一せられなければ、内地延長云ふことも有名無實である、其處に到達することには、朝鮮の政治は内地と同様と爲り、内鮮一體たることの表示が出来るのである、朝鮮人を内地人と無差別同等にするには、其の國民的地位を内地人と同等にまで引上げて呉れなければならぬ、彼等内鮮人が權利の上に義務の上に於て、平等であり得ない間は、

幾ら總督が内鮮人は無差別だ云つて見た所で、差別の生ずるは免かれまい。そして朝鮮人はそれを知り抜いてゐても、横車を引くものが多く、その感情の交響は、彼等冷靜であり得ない、不肖は今内鮮府縣制の統一より來る朝鮮の政治が、如何なる實質を迎へて進むであらうかを述べて見やう。

大體内地延長を標榜したる朝鮮の政治に於て、總督府は或は無用の一機關であるかも知れぬ、併しながら朝鮮が土廣一萬二千方里、人口二千萬を有せる大民族の社會にして、其の人情風俗思想を異にせる民族の整理指導開發には、或期間内總督府を置いて、全鮮の政務を統合して内地に連絡し、之を指導し案配することゝに於て、大に必要がある、特に近年我政黨政治の墮落に鑑みれば、何ふしても朝鮮は特立したる總督府を残存して、内地の政變に由て朝鮮政治の局に當る官吏の交代や、罷免せらるゝの弊を防ぎ、朝鮮の事情に精通せる官吏をして、治鮮の機能を直接に發揮せしむる方が、政治の運用上至便に考ゆるのである、そして道を變じて縣とし、同時に府縣區劃の變更を

民族の整理指導

自治の形式さへ残つて居る

行ひ、更に縣治の下に於て、郡面の整理融合を斷行して、他日市町村制實施の準備を爲し、前途十年二十年にして、適當の時機を見て、全然内地同様の市町村制を實施するに云ふのである。

斯くて始めて朝鮮は、日本内地人と同じ無差別にして、國民的權利の上に將た義務の上に於て、劃一の政治が行はれる、茲に來つて土地と人との大團結が出来るのである、按ずるに朝鮮は古代に於て既に縣治あり、李朝時代に於ては自治の形式さへ残つて居る、道が縣なるも、政治の實質には變はりがないが、不肖は道が縣に改稱せらるゝことに於て、而して面洞が町村に稱せらるゝことに於て、内鮮人に内地延長の實際的感觸を與ふる上に、大に必要なる題目であるを考ゆる、名の名をすべきは、宜しく日本的に改稱すべし、郡町村の廢置分合は、須らく國勢の趨向に交通變遷の實勢に順應して、適當の排列を講じなければならぬ。

茲に來つて朝鮮の政治施設は、概括的に解決せむ、今や世界の文化は滔々として、朝鮮の文化亦昔日の比に非ず、須らく更始一新の氣象を奮發すべしだ。

斯くて不肖の論策當局の議題に上ることありて、行政區劃を設定せむとする曉には、種々の方面より觀察して、行政の運用に資するの調査を行はねばならぬ、不肖は先づ朝鮮が各道重要都市建設の由來より説いて見やう。

第三十篇 朝鮮縣治論 [二]

三、行政區劃の考察

四、自治制施行の基本調査

按ずるに、朝鮮の建都は、運輸交通を基礎として設定されてある、而して現代の如く鐵道交通の發達なき時代に於ては、河川は唯一の交通路であつた

各道重要都市建設の由來

輿地勝覽や大韓疆域考

現今當局が河川の修築に着手し、又は着手せむとする朝鮮の十三大川、即ち梁山江、成川江、戰寧江、洛東江、錦江、漢江、大寧江、臨津江、清川江、大同江、鎭成江、楡津江、龍興江の如きは、朝鮮の産業に雄大なる歴史を有して居る。

何れの邦國に於ても、其の山脈と河川とを以て、其の國境線を劃して居る而して朝鮮の如く其の區劃を明瞭にしてゐるものは少ない、古書を繙き、東國輿地勝覽や、大韓疆域考なきを一讀すれば、豆滿江の露支に於ける、鴨綠江の支那に境界せる、大同江は平安の州界を爲し、漢江の上流は京畿忠清の交界を成し、錦江を以て全羅忠清の分界と爲すが如きは、皆之れ自然の國境線である、獨り洛東江の全羅中部を貫通する如きは、少しく其の形勢を異にせるも、曾ては之れ大伽羅、新羅兩國分立時代には、乃ち兩國の分界線であつた。

之等の大河流は、實に朝鮮興亡の歴史と、朝鮮の産業盛衰の歴史と、密

接なる關係を有せるものにして、譬へば其の朝鮮古來建都の歴史を見むが、金官國の洛東江下流に於ける、新羅の洛東江左岸に於ける、古朝鮮の遼河畔に於ける、馬韓の錦江益山、百濟の漢江支流稷山に於ける、高句麗の鴨綠江岸の丸都に於ける、李朝の漢江河岸に於ける、皆之れ江河を基礎せざる建都に非ざるものはない。

現代に於ける朝鮮の都市を一覽するも、又悉く之等江流に關係を有せざるものは蓋し稀である、先人治國の經綸、濟民の遺業は、都市の經營に於て其の苦心の存在せることは、之を窺知するに難くはない。

然るに近世に至り、海陸交通運輸の變遷より來る朝鮮の社會は、都市の地理に實力の上に影響を及ぼすこと少なからず、加之併合以來當局の施政其の宜しきを得、土地改良、荒蕪の開墾より來る滄桑の變遷、内鮮人口の増加と物質集散の趨勢より來る土地の状況に依り、朝鮮の都市計劃に變遷あるは勿論、而して今や行政區劃に大に考慮を要するの時期に際會して居る。

現代に於ける朝鮮の都市

現今道廳の位置

日進月歩の社會に於て、行政區劃が土地の現勢に左右せらるべきは己むを得ない、交通の便否に依て改廢せらる、こゝも亦己むを得ざる次第である、只其の變更改廢に就ては、現在及將來を微細に考察し、地勢と人口物質の趨向を詳かにして、而して後行はるべきものである、之は一に當局の士の遠觀に待たなければならぬ。

顧ふに現今の道廳は在昔觀察使の在りたる所にして、併合後道を襲用して道長官を置き、更に道知事と改稱した、現今道廳の位置は。

- 京畿道廳……………京城府
- 忠清北道廳……………清州
- 忠清南道廳……………公州
- 全羅北道廳……………全州
- 全羅南道廳……………光州
- 慶尙北道廳……………大邱

慶尙南道廳……………釜山
 平安北道廳……………新義州
 平安南道廳……………平壤
 黃海道廳……………海州
 江原道廳……………春川
 咸鏡北道廳……………羅南
 咸鏡南道廳……………咸興

將來縣廳の所在地として適當であらうか

以上十三道廳である、此の十三道廳所在地は、將來地方行政の主腦地として、縣廳の所在地として、果して適當の位置であるか何ふか。

平安北道廳は、曾て義州に在りたり、慶尙南道廳は曾て晉州に在りたり、然るに執れも數年前一は新義州に、一は釜山に移轉したものである、交通及運輸物資集散の關係に、中央當局の行政運用の敏活を計る便宜の上に於て其の移轉を見たるは當然の事であらう、而して郡は韓國時代に於ては三百五

行政區劃調査

十郡を有してゐたが、それは餘りに多過ぎた、蓋し韓國時代の行政區劃は、誅求の便に人の爲めに多くせられたるものにして、併合後は之を二百四十郡に減じた、交通通信の發達したる今日に於ては、或はもつゝ減じても宜しいかも知れぬ。

面は内地の村である、其の内指定面は内地の町に匹敵する、朝鮮の全面数は約二千五百面あるが、之れも細密に調査して町村名に変更し、町村區劃の変更だけは同時に行ふ可しである、當局は須らく先づ行政區劃調査會を起して、着々府縣制實行の準備に取掛る可しである、要之道治を縣治にすることに、内地延長の根本的理想であらねばならぬ、當局が同化策を撤回して、朝鮮を植民地として經營するならばいざ知らず、内地延長の理想で打ち通し、全然内地の延長したる朝鮮として政治するならば、内鮮は早かれ晩かれ縣治の統制を見なければならぬことは當然である。

故に不肖の議論は、全然内地の延長たる朝鮮として取扱はむとするのであ

る、同化策を抛つて將來若し植民地として取扱ふなれば、不肖の議論は又自
から別様の意見を立てて出發する、茲には不肖は當局の大方針たる治鮮策に
迎合し、内地延長の朝鮮として論議するので、縣治の形式を探り、朝鮮の行
政區名を内地と同一稱呼の下に置くことが、朝鮮の土地と人々を併せたる、
當局の同化方便でもあり、又當然の事と考ゆるのである。

願ふに齋藤總督は、朝鮮文化の趨勢と、民心の趨向に察し、來任の劈頭に
於て「各級の行政に刷新を加へ、且將來機を見て地方自治制度を實施し、以
て國民の生活を安定し、一般の福利を増進せむことを期す」と宣言された、
是れ實に大正八年九月にして、聖天子の綸言は汗の如く、朝鮮總督としての
齋藤子の宣言は、並大抵の事情ありとも、斷じて之を葬むることは出来ない
適當の時機に於て自治制を施行せむと内鮮人に豫約されたのである、不肖の
縣治論は總督の方針に隨ひ、其の先鋒を承はるのみである。

斯くて齋藤子は、來任後一年ならずして、地方制度を改正し、中央集權の

齋藤子の宣言

朝鮮の文化は
今昔を異にす

弊を認めて、地方分權の形式を探り、地方行政諮問機關を設置して、民意の
暢達に資し、而して此の改制は自治制度施行の段階なりと宣言された、爾來
當局は此の趣旨に依り、地方民を開發指導して、速かに一般民に自治制度の
本旨を諒解せしめ、之が運用に慣熟せしめむとして、地方廳の諮問機關たる
地方評議會なるものを設置した。

願ふに、總督政治以來既に十八年、齋藤子の地方制度改正以來又既に八年
朝鮮の文化は今昔を異にし、其の整理開發は刮目に値ひする、されば最早朝
鮮に内地同様の自治制度を施行するの理論は立て得られざるに非ず、然れも
も朝鮮の文化は之を大觀的に查察しても、都會と地方とは文化の程度と普及
に非常の軒輊がある、都會人の智識と民度は自治の運用に不足はあるまいが
地方民の智識と民度を詳かに觀察するに及んでは、未だ俄かに全朝鮮を擧げ
て自治制を施行し、政治權を分擔せしむることは、絶対に不可能でもあり、
又之を強行することは苛酷である、總督政治は未だ自國の臣民にすら、國語

を強ゆる能はざる状態に於て、農商工民の識者を網羅せざる可からざる地方の自治制度が、完全に行はれやうきは夢想だもするこゝは出来ぬ。

日本内地に於てすら、人民は久しく自治の負擔に悲鳴を擧げたるこゝあり朝鮮に於ては地方民は國稅の負擔にさへ苦むで居る有様なれば、大都市のみ限り特別自治制を施行するこゝが權宜の處置である、兎も角一般的に自治制を施行するまでには、朝鮮文化の普及程度を民度より觀察して、前途十年や二十年の幾月は経なければならぬ、朝鮮人民素より自己の生存せる社會郡面公共の事務に參與し、地方團體の發達に奉公するは、朝鮮社會の一員として、當然の義務なるは勿論である、併しながら現今地方朝鮮人民をして團體又は公共の爲に獻身的努力を爲さしむるまでに、義務の觀念は發達してゐない、日本内地自治制施行の當時に溯つて觀れば、其の文化の程度や、民度や、民心の緊張振りは、敢て較論ではない、故に當局は先づ大都會に限りて特別自治制を施行するの準備として、其の社會状態や生活程度やを調査する

特別自治制

都會地中心に實現

所の調査機關を設け、其の調査會は官民識者を以て組織し、水も漏さぬ調査を完了して、而して後總督は英斷を以て、内地延長の實際政治を、都會地中心に實現されむこゝを期待するものである。

第三十一篇 齋藤總督去り山梨總督來る

——齋藤子病軀を以て骸骨を乞ふ——
——山梨朝鮮總督に望む——

帝業を眞理に依りて擴大された

回顧すれば、齋藤子が朝鮮總督として來任せられたるは、大正八年九月であつた、當時の我政府は朝鮮騷擾を武斷政治の罪と誤認し、廟議を経て政治政策を變更し、齋藤總督は文化政治の徳政主義を以て朝鮮に在り、苦心懃懃騷擾を鎮撫し、滿八箇年の努力は、一視同仁の御政治哲理に據りて、我聖天子の徳を布演し、帝業を眞理に依りて擴大された。

齋藤子の徳政は、八箇年にして全朝鮮を蔽ひ、其の文化の發展は刮目して見るべきものあり、大正九年七月に改制せし地方制度は、今や漸く圓轉消脱の運用機に入り、内鮮人の智徳を劃一にせむとする朝鮮教育は、今や逸足の

雄大なる皇謀

進歩發達を爲し、治山治水問題より、關稅の撤廢に基因する内鮮産業の同化經濟及金融の發展、農業の改善、水利事業の開大、乃至林業水産業より、衛生事業の發展は、文化政治八年間に於て相當の成績を擧げて居る、特に産米増殖計劃の策立より來る、土地の改良事業の如き、其の部署漸く成らむとし追々内鮮人劃一の政治を布かむと準備せる所、聖天子の天下を以て一家と爲し、内鮮人を以て一人と爲さむとする所謂大同の世界を理想された。

恭しく惟みれば、明治大帝の韓國併合の御趣旨は、内鮮人を打て一丸とし内鮮人同化の上に大陸大日本を建設するの雄大なる皇謀であつた、朝鮮は極東の舊邦、歴史ある民族の末路にして、廣袤一萬二千方里、二千萬民族を包擁せる大社會である、古へ老子曰く、大國を治むるは小鮮を養ふが如し、宜べなる哉、騷擾以後の朝鮮人は、祖國回復思想鬱勃として起り、民族主義急進主義共產主義等、各種の思想は奮興して、今や百花爛熳の状態である、或人曰く、齋藤總督の徳政は、如何に全鮮に光輝を放つても、徳のみを以ては

現代滑智の民族は御せられない、齋藤子は徳餘りありて威嚴足らず。成る程それはよく議論の行はる、所であつた、聖人の金言として尊重すべき句に「之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば、民は死かれて耻なし、之を導くに政を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥ありて且つ格る」

こある、此の句は古今の政治論中に卓越せる見解を評せられて居る。齋藤子は聖人の政道を以て朝鮮を治めむとした。

不肖思ふに、我朝鮮統治は、儒家の所謂禮治主義も必要であらう、法家の法治主義も必要である、朝鮮は儒生の多數に生存せる社會だ、儒家の最も貴ぶ所は仁政であり、徳政だ、齋藤子は此の點に着眼し、先づ儒者の心を囚へて庶民の歸向を獲むと熱心された、さりながら朝鮮の民心は、儒者も兩班も學生も農民も町人も、昔日の純一性は夙に喪失して、滔々祖國回復心に一致してしまつた。

古今の政治論
中に卓越せる
見解

帝國民的意氣
日に墮落

是より先、大正八年騒擾の當時、齋藤總督水野政務總監の來任せらる、や水野氏は朝鮮人の興奮を在鮮日本人の横暴に基く反抗なりと誤信した、故に内地人を壓制するこゝに非常の努力を拂はれた結果、若し内鮮人間に紛争起り、喧嘩でも惹き起せば、警官は之を交番所に引致して、是非を訊ふに違なく内地人を叱り飛ばし果ては一掌を加ふるこゝさへ珍らしくなかつた、斯くて一方は萎縮し、一方は増長し、内地人の思潮は此の八九年間に著しく沈滞して、帝國民的意氣は日に墮落し、日本人としての歴史的自負心は消耗し、大日本主義の勇敢進取の氣象は著しく衰退し、何事も謹慎卑屈に、其の口くを無事安穩に送るを無常の幸福とし、不肖等の理想たる日本青年の勇敢なる膨脹力は、大なる違算を來しつ、ある、甚だしひ哉現代在鮮内地人の意氣の振はざるや、知らず我現代大陸發展の大日本は、此くの如く謹慎卑屈の青年民族を率ひて、果して大日本主義の大旗を翳さし、朝鮮經營を完成し大陸發展を遂行し得るや否やは、實に疑問である。

方今世界を大觀すれば、西歐の現勢今昔を異にし、東洋の形勢舊日に非ず實に我國民が内は人心を興奮結束し、外は朝領土の經濟的地盤を鞏固にして國富を増進し、一致團結して勇進すべき秋である、而して特に卑屈墮落腐敗せむとする青年の士風を激勵して、現代の思潮に着眼せしめ、確乎たる主義信念を懷抱せしめて、朝鮮經綸に於ては、諸般の大計策は大和民族の發展膨脹に適應するの段取を立て、而して其の機關を設備して一絲亂れず、堂々の陣を張て邁進せなければならぬ、今や世界の現勢は民族本位の政策に依りて或は干戈を動かし、或は樽俎折衝に輪贏を角しつゝある、朝鮮現今の思想と傾向を以てせば、實に大和民族が文化政治の文弱の風に伏して、自ら萎縮すべきでない、我大和民族は正に國民的勇氣を奮發して、膨脹發展の方策の下に斷々乎ミして進まなければならぬ、現今は實に朝鮮民族心理の動く所を明察して、文弱墮落の風潮を一新し、我國民的風潮を振興せねばならぬ、必ずしも文化政治が行詰つて居るミ云ふではないが、此の儘にして押し遷らば

堂々の陣を張て邁進

行詰るのは目に見えてゐる。

此の時に方り、昨春齋藤總督が、壽府軍縮會議に帝國全權として、朝鮮を出發せられ、陸軍大臣宇垣一成氏朝鮮總督臨時代理として親任せらるゝや、總督交迭の風説は宣傳に尾鱗を生じて、朝鮮の官海には時ならぬ低氣壓を示し、民間内鮮人に於ても臆測を逞ふし、暗雲低迷して流言頻りに飛び、朝鮮統治の政海に波靜かならざる状態を示した、東電は頻りに報じて曰く「宇垣臨時代理總督が、田中首相と親善にして、特に前議會に於て機密費問題に田中首相を助けたる恩義もあり、如何なる手段を以てしても、田中首相は宇垣氏を朝鮮總督たるに盡力する模様なり云々」ミ、不肖思へらく、朝鮮總督は苟くも陛下の御名代として鉞を朝鮮に受けたる者、然るに田中首相が私情を以て、而して一種の策略を以て、區々然として朝鮮總督を交迭せしめむなきは、不肖は寸毫も世論を信ずるこゝは出来なかつた。

況んや齋藤總督は、老軀を挺して帝國を代表し、壽府に使せる留守中に於

朝鮮統治の政海に波靜かならざる状態

樽俎折衝に努力せる老總督

て、總督交迭を宣傳する言論機關の輕兆なるに憤慨し、不肖は毅然として總督交迭の不條理なるを主唱した、思ふに朝鮮總督は陛下の親任せらる、代官にして、其の去就には帝國臣民は禮を以て送迎せざる可からず、禮は人道の至極にして、王道に對する民衆の誠意であらねばならぬ、然るに萬里の波濤を蹴て異國に使い、樽俎折衝に努力せる老總督の不在に於て、其の交迭を妄想し、誹謗罵倒の辭を其の頭上より浴びせるの言論機關あるに至つては不肖は人心の浮薄にして、其の利巧の打算に敏なるに感心せざるを得なかつた、鬪雲覆雨、表裏滔々、不肖等は我操觚者に神仙の高風なきを切に遺憾とするものである。

而して當時若し田中首相にして世論の如く、私情を策略を以て、朝鮮總督交迭の途を開かば、之れ永久朝鮮の禍根にして、將來内閣の交迭毎に、朝鮮總督の椅子は黨人に窺奪せらる、云ふことなるであらう、田中首相は一時的權道を以て、而して黨勢を利用して、朝鮮統治の大任を帯ぶる總督を、

齋藤子宿患咽喉に發す

一指顛に撼搖するやうな暴君振りは敢てせなかつた、斯くて齋藤子は大任を終へ、昨年秋十月歸朝して天顏に咫尺し、軍縮會議の巨細を奏上し更に之を首相に報告して十一月歸任さる、や、朝鮮の士民は歡呼して之を迎へ、景福宮に於て慰勞的歡迎の大宴遊會は開催せられ、茲に全く風説の製造子は沈黙した。

齋藤子は、歸任後留守中の政務を統理せらる、ここ一箇月、精勵晝夜を擇ばず、加之各方面の歡迎宴に臨むで身心著しく疲勞を覺へ、遂に宿患咽喉に發し、東京に轉地して良醫の投藥を受けられたるも、病ひ荏苒さして癒へず昭和二年十二月七日遂に閣下に伏して辭表を捧呈された、茲に至りて朝鮮總督後任問題に依りて、世論は頗りに動き、齋藤子が壽府使節中の臨時代理總督たりし、宇垣氏は頗る其の呼聲高かりしも、一面に於て山梨總督説擡頭するや、内鮮の國文新聞は一齊に反對説を掲げ、京城に於ては操觚界の一部には、山梨氏反對の決議さへ行はれむとし、其の會合が催ふされたが、異論者

ありて其の決議を見るに至らなかつた。

此の世論囂々たる中に於て山梨氏は十二月十日朝鮮總督に親任せられ、東京に於て前總督との間に事務引繼を完了し、齋藤子は樞密顧問官を爲り、山梨新總督は、十二月十九日朝鮮に來任された、幾もなく湯淺政務總監辭表を捧呈し、池上四郎氏は政務總監に親任された、池上氏は前大阪市長たりしとき名市長を誣はれた人である、此の新總督政務總監は、果して如何なる政治政策を以て、此の難治の朝鮮を統治せらるゝであらうか。

思ふに朝鮮總督は、聖天子の御名代に於て朝鮮を統治するもの、國家に勳功多くして、陛下の御親任厚き人である、然るに近時滔々たる政客新聞記者等、立憲政治の民衆主義に借口して、動もすれば大權の發動を輕視し、其の尊嚴を冒瀆せむしして恥ぢ懼れざるが如きは、之れ斷して聖世の氣像に非ず不肖等は恐懼して其の弊を悲しむものである。

今や帝國の國運月に年に隆盛に、王道嚴として四海に光被せむとするの慨

池上名市長

治鮮の草紙に
失ふ分量

を示し、特に朝鮮の如きは王道の活躍せる處、將來盛んに經綸を行はざる可からざる時に方り、黨風蕩々來つて朝鮮の官機を紊さむか、黨勢の一什一起に因り、生民は治者の送迎に忙殺せられ、帝國の政治家が治鮮の草紙に失ふ智識の分量は、莫大なるを致すべく、我政治家の朝鮮學は、一年や二年は小學時代にして、朝鮮の風土が内地と異なる如く、朝鮮の民族魂は大和魂と撞着あり、其の人情風俗舊慣必らずしも相同じからざる點に於て、我政治家の苦心は、一に朝鮮學の深淺に負ふ所大也、東京の政治家は前途幾十年間、朝鮮を政争圏外に超然たらしめねばならぬ。

世人動もすれば、政友什れて民政内閣を組織せば、山梨總督は直ちに其の交迭を餘儀なくせらるべし、不肖等は實に此くの如きの説を不快とす、内閣交迭毎に朝鮮總督が陛下の親任を失はば、朝鮮統治の政權は絶へず我政治家の窺察する所ならぬばならぬ、今や日本の政界は、政黨に節制無く、漫然たる一個の集團に過ぎざるの觀ありて、政黨としての効用を發揮するこ

政黨政治埋葬の甲鐘

能はず、政權爭奪に没頭して居る、不肖等は輒近我政黨政治なるものに、不平を唱へざるを得なくなつて來た、不肖等は今の代議士なるものの無自覺無理想なるの故を以て、直ちに我政黨政治の没落無用を論ずるものではないが我政黨が今日の狀態より正覺に立ち歸るこゝが出来なければ、總て識者は政黨政治埋葬の甲鐘を打たなければならぬ。

我山梨總督は、此の墮落せる政黨の圈外に立ち、毅然として朝鮮統治に粉骨碎身し、以て陛下の親任に奉答せられなければならぬ、内閣交迭して總督の椅子を撼搖せむとするが如き魔手伸び來るこゝもあるも、聖天子の御威光を尊重し、斷乎として之を擊退し、一指をも染めざらしむるの概を以て、朝鮮統治の大任を完ふせられむことを希望するものである。(完)

昭和三年三月十九日 印刷
昭和三年三月二十二日 發行

總督政治史論

定價金拾圓

京城府黃金町二丁目百四十八番地

著者兼發行者 青柳綱太郎

京城府黃金町二丁目百四十八番地

印刷者 佐々木太平

京城府黃金町二丁目百四十八番地

印刷所 京城新聞社

版權所有
不許複製

249X52





